

次ページへ続く

Continued on next page...

## 源氏物語青表紙本の書写伝来の一形態

——室町期以来の寄合書と一筆書——

池田利夫

- 一、二部の三条西家本「青表紙証本」——曰大本と書陵部本——
- 二、書陵部本（大系本底本）桐壺・須磨兩巻の本文系統
- 三、書陵部本玉鬘巻の本文系統と吉田本
- 四、書陵部本のうち六巻が青表紙本系統にあらざる論
- 五、近衛尚嗣・基熙父子の源氏物語書写の顛末
- 六、陽明文庫蔵後柏原院宸筆等源氏物語の本文と実隆の役割
- 七、陽明文庫蔵源氏物語八部余の解題
- 八、山岸徳平氏蔵明融本の行方と国文学研究資料館蔵写真副本
- 九、山岸氏蔵明融本本文の性格——明石までの九帖を通して——

### 一

三条西家本の源氏物語というと、まず二部の本が思い浮かぶ。一部は、実隆が晩年に公条や公順の協力を得て写し、家本とした一本である。こ

の本は、一時期、豊臣秀次に召し上げられていた形跡もあるが、永く三条西家に伝来し、戦後になって、昭和三十三年三月二十九日付で、日本大学図書館に譲渡された。夕霧を欠く五十三冊本であり、証本源氏物語と呼びならわしてきた。

もう一部は、やはり実隆等筆といわれる五十四帖揃い本で、宮内庁書陵部に蔵する。これは長い間未整理本の中にあつて、ほとんど閲覧されなかったが、昭和三十三年一月より、山岸徳平氏の校訂によつて刊行された日本古典文学大系本（岩波書店刊・以下、大系本と略称）『源氏物語』の底本にされた上、影印本としても出版された。<sup>注1</sup>従つて大いに流布し、今ではむしろ、三条西家本という、これを想起する向きが多いほどであらう。

書陵部本には各巻末に実隆の花押をとどめるが、(一)桐壺と(二)夢浮橋には、次のような実隆の奥書が識されている。

(一) 此物語五十四帖以青表紙証本令書写校合、銘是当代宸翰也、殊可

謂珍奇、可秘藏<sup>々々</sup>

権大納言実隆（花押）

(二) 此物語以青表紙証本終全部書功者也

蛭槐下拾遺小臣（花押）

実隆が権大納言であつたのは、長享三年（一四八九）三十五歳の二月二十三日より、永正三年（一五〇六）五十二歳の二月五日までである。また、(二)の「拾遺」、すなわち侍従であつたのは、四歳で叙爵について任じられ、爾来、権大納言より内大臣に昇進するまで兼帯していたので、奥書に依る限り、右の書写年代は、十七年間の幅を縮めることができない。またこれには付属文書として、「源氏物語筆者之数」があり、古筆家の鑑定として、篝火一帖を実隆とするのをはじめ、十余の筆者名を当てている。そこでこれら生没年を勘案して、延徳四年（一四九〇）、実隆三十七歳の頃の寄合書とする試みもなされているが、後世の極めである以上、鑑定による推定にはかなりの吟味を要するのである。

一方、日大本には各巻に多くの奥書があつて、書写経過を辿る上で有力な資料となっており、例えば手習では次のように識されている。

以証本書写之、老後之手習無其益、慚愧<sup>々々</sup>、享禄辛卯正月廿日、  
肖遙叟<sup>七十七歳</sup>、読合直付了

書陵部本の二つの奥書に「青表紙証本」とあり、今ここにまた「証本」とあるのは、具体的に何を指すのであろうか。山岸徳平氏は、さきの(一)と右の奥書とを示され、書陵部本は「大体、実隆自筆であり」、従つて日大本手習奥書にある「以証本」という「この証本とあるのが、本書の底

本に用いた青表紙証本を指すのである。この奥書のある本（日大本など―池田注）、即ち本書の底本の転写本を、一般には、三条西家証本と称している」とされている。そればかりではない。大系本源氏物語五冊の各冊凡例には、かならず第一条に「本書は、三条西実隆筆になる青表紙証本を底本とした。いわゆる三条西家証本の親本である」と明記されている。大系本として、あるいは影印本（この総合解説―山岸徳平・今井源衛両氏―にも大系本解説は再録されている）として、源氏物語研究に有力なテキストを提供しているのを思うと、なおさら、このような断定は、訂正を要するのではないであらうか。

まず「大体、実隆自筆」とあるのが修正を要する。古筆家の極めが信を措きたいのは、写本に限らず、手鑑、古筆切に添えられた伝称筆者のほとんどが誤りであることでも知られるが、寄合書のような場合、異なる筆跡を異なった筆者として区別する点では、あまり誤りが無いように見受けられる。書陵部本の極めにある十余筆の個々の人名については、確かに疑うべきであるが、これが十余の写し手の寄合書であるのは、疑いがないのである。(一)(二)の奥書に見えのと同一実隆の花押が、各帖末すべてにあるのは、実隆がこの書写の統合者であることを意味している。まさに三条西家本源氏物語の体裁をなしていることはいるのである。

次に、二部の三条西家本奥書に見える「青表紙証本」あるいは「証本」がいかなる関係にあるかを明らかにする材料が、本文自体を比較する以外には何もないことである。書陵部本の書写年次が特定できないとしても、権大納言兼侍従であつた最後の年、実隆五十二歳から数えて、日大

本の成立は二十五年後のことになり、この期間は四十二年にも拡大して考えることができる。すなわち両書は、四半世紀以上もの時を隔てて書写されたのである。

日大本については、つとに山脇穀氏が久原文庫本（現、大東急記念文庫蔵）を用いて考証され<sup>注4</sup>、ついで原本に基づき、当時の所蔵者である三条西公正氏が詳細な報告をなされた<sup>注5</sup>。そして近くは岸上慎二氏が、桐壺・夢浮橋二帖の複製本刊行に際しての別冊解題により、この書写経過を一層明らかにされている。実隆公記によって裏付けられた奥書群の語るものは、以上の諸論によってほぼ解析し尽くされたと言つて良いが、それでも、手習の巻の親本という「証本」が何を指すかは明らかでない。細かい論点を示すのは本稿の主旨ではないので諸氏の論に譲るが、この書写が、かねて宗碩・宗牧を仲介として懸望されていた家本の源氏を、享祿二年（一五二九）八月二十四日に肥後の鹿子木親員に売却、手渡したために生じた措置であることは、刻々の経過まで実隆公記に辿ることができる。親本探しはそこから始められたのであり、結論のみを述べれば、桐壺より紅葉賀までの七帖は、大永五年（一五二五）より公条が写しておいた本を、実隆が桐壺が飛為井雅康筆本、帯本は古本を以て改めて読合せたりした本を転用した如くである。そして花宴を享祿二年十一月十日に書き始め、公条・公順を督励して全帖の書写校舎が終了したのは同四年二月二十三日、用いられた本は姉小路濟継が明応五年（一四九六）六月十三日以降、当時の実隆所持本（永正三年八月二十二日に甲斐国某に売却した実隆一筆書写の秘蔵本か）を借りて写した本十七帖、能登の

畠山義総から送り届けられた肖柏旧蔵の古本（帖数不詳）、実隆の「愚筆ノ本」（胡蝶）、それに「証本」（手習）ということになる。

ここにいる「証本」が、この書写に際し、最も重視された能州本に対する評価の呼称、または、次の夢浮橋を書写することで間もなく完成する五十四帖それぞれの巻ごとに、青表紙本として「証本」と呼ぶにふさわしい最善の本文を求めたとする自負の言、とも受け取れるが、ともかく親本が揃い本でないのは確かである。すなわち、揃い本である書陵部本は、日大本（いわゆる三条西家証本）の親本である筈がないのであつて、今、本文の検討を一切除いて考えても、そうした指摘は誤りと言わねばならない。そして書陵部本が、永正三年に実隆が売却した本でもないのは、そちらの本文が実隆一筆であつたことのほか、「銘後成恩寺禅閣筆」ともあり、外題が一条兼良であるとも注記されていて、書陵部本の「銘是当代宸翰也」とあるのに対立することでもわかる。なお「当代」を山岸氏は後柏原帝とされるが、筆跡の上でそう鑑定しうるなら、この本の書写は明応九年（一五〇〇）十月、実隆四十六歳以降となつて、書写年次の幅は一挙に六年間に短縮される。勿論、これより前の筆写とすれば、「当代」は後土御門帝でなければならない。

それでは、書陵部本の首尾の巻奥書にある「青表紙証本」とはいかなる本であつたろうか。山脇穀氏の実隆に関する一連の論考に導かれて<sup>注7</sup>実隆公記を翻読したが、この本の書写自体が年次を特定できないので、親本はなおさら明らかでない。ただし山脇氏が指摘されるように、実隆公記の中で、自分のための源氏物語全部の書写がなされている最初は、文

明十五年（一四八三）、実隆二十九歳の七月一日（あるいは文明十三年三月八日に遡るか）に始められ、同十七年閏三月二十一日に終ったことである。その後、機会あるたびに他本との校合に怠りなかった様子もうかがえる。そうした頃の文明十九年三月三十日の条に、山脇氏論文から再引する

朝間宗祇帰来（中略）青表紙正本箒木卷令見之、盛者也

とある。氏は「今まで本で読み話に聞いただけで、夢のやうに理想して居た定家本を眼の前に見たのだから、嘸かし胸を躍らしたことであらう。「盛者也」と日記に書いた心持は、この種の経験のある人には、十分了解ができる筈である。翌四月一日の日記に「晝間箒木卷校合」とあるのは、早速この一帖を自分の写した本に校合したのであらう」と言われている。氏の見られた実隆公記の写本に「盛者也」とあった部分は、活字本によると、「感□者也」とあるが、同じことで、実隆を感銘させた「青表紙正本」は、やはり定家筆本と考えるのが相当であらう。

しかし、書陵部本奥書の「青表紙証本」が定家筆本でないまでも、それに準じる揃い本であつたかという点、否定的にならざるをえない。この本の幾つかの巻には、そもそも青表紙本であるかどうかさえ疑わしい本文が含まれているからである。話は戻るが、（一）では外題が「当代宸翰」であることを強調して「殊可謂珍奇、可秘藏」と述べている。奥書の常套句ではあるが、いわば書写の依頼主に価値の高さを認識させる文言とも見られる。書陵部本の書写年代より後になるが、大永五年四月二十四日の実隆公記によると、例の能州より、宗碩を通じて、このたび

実隆の指揮で完成した源氏の外題に宸筆を賜われないものか、との依頼が来ている。奏請は成功して整えられた本に、実隆が箱に銘を揮毫し、七月一日に、上洛した使いの者に渡している記事によれば、能州からの書状に「千疋有相送之由」とあったという。後柏原帝の外題、実隆箱書の本は、地方の守護大名にとっては、まさに珍奇であり、秘蔵に値するのは当然であつたらう。年紀を欠く書陵部本奥書からは、これがいかなる経緯で写され、誰に与えられた本かを明らかにしたいが、本文の内容を吟味することで、その性格をうかがうこととしたい。

## 二

上述のように、書陵部本は未整理本の中に埋もれていたために、池田龜鑑氏の「源氏物大成」（以下「大成」と略称）に言及はなく、大津有一氏の「諸本解題」<sup>注8</sup>でも（筆者）は「山岸徳平氏の説によれば、大体三条西実隆であるという」（内容）は「本文系統は青表紙本で、世に三条西家証本と称しているものの原本である」とされた上、これが大系本の「底本」とされたので、ここではその写真と解説によつた」と断わられている。

これに対し、いわゆる三条西家証本は、「大成」本文篇の校異本として全冊が対校されているが、ここにまた不審なことがある。日大本は三条西公正氏が家蔵本として世に紹介された昭和五年の時点で、すでに夕霧の巻一帖を欠いた五十三冊本であつた。ところが「大成」では、どうしたわけか、夕霧の巻にも略称「三」として校異が掲出されているのである。巻ごとに提示される校異本一覧にも、他の巻のと同様に「三条西伯

爵家蔵」とあり、特に断わりも見当らない。また巻七の「研究資料篇」には「現存重要諸本の解説」として四十四部の本が紹介されているのに、三条西家蔵とあるのは、伝寂蓮筆若紫巻のみで、「証本」への言及はないのである。ミセケチ・補入部分までも細かく示されている『大成』三条西家本夕霧とは、何を用いたのであろうか。『大成』成立の協力者のお一人であり、旧蔵者の公正氏と御親交も深かった松尾聰氏にお伺いしたところ、氏も驚かれ、事情は御存知ないと言われる。ただ三条西家本と称して代りに用いる本としては書陵部にある宸翰の模本であらう、という点では氏と意見が一致した。

宸翰の臨模本は書陵部蔵の桂宮本に三部もある。一部は後陽成院宸翰本（夢浮橋のみ宸写の寄合書。慶長十九年二月書写の院奥書。葵・篝火・紅梅三帖欠）であり、もう一部は霊元院宸翰本（夢浮橋のみ宸写の寄合書。絵合二帖欠）、更に一部は桜町天皇（桐壺）・中御門天皇（夢浮橋）の宸写を含む宸翰本（寄合書。紅葉賀一帖欠）である。書誌などについては『図書寮典籍解題 文学篇』や、大津氏の「諸本解題」に見える通りで、要するに、奥書は勿論（但、三部目の本は手習・夢浮橋にある奥書のみを写す）、本文も、当時は揃い本であった日大本を、字詰・字形までも臨模した本が、それぞれ、伝来のように欠帖を生じたのである。そして、霊元院本は寛永頃、再び書写されており、天理図書館に、実隆奥書群を始め、院奥書をも写した揃い本が所蔵されている。なお、天理本は桃園文庫旧蔵本らしく、明石の巻付箋に「昭和十二年六月十四日以三条西家証本一校畢 長船 清水」と記されている。『校異源氏物語』巻頭

序に、池田氏の協力者としてお名が見える、長船省吾・清水文雄両氏であろう。また本文や奥書にも「三条西家原本」と比較した付箋が多く見られるので、『大成』夕霧の三条西家原本は、ひょっとして直接はこの本であったかも知れない。いずれにしても『大成』は何を用いたか断わるべきではあつたらう。

さて、大系本の源氏物語では、各冊末に「校異」が示されているので、『大成』所収本以外の青表紙系の有力諸本との異同が一覧できるが、第二冊目より「紙数の関係上、特に重要と思われるものだけを掲出」に方針が変更された。それでも、対校本の一つに「後陽成帝宸翰等の本、書陵部蔵」（略号「後」）が加えられているのは、間接的にはあるが、底本の書陵部本と日大本との異同を見通す上では便利である。例えば桐壺よりすべてを摘記すると、次のようである。

- 27 ⑨ こゝろをのみこゝろを 28 ① ちゝの大納言ーちゝ大納言 ④  
うしろみしー御うしろみし ⑫ はゝ君ーナシ ⑭ まうのほらせ給  
ひーまうのほらせ給ふ 29 ⑪ わた殿のーわた殿 31 ⑭ まかてさせ  
たまふーまかてさせ給ひつ 36 ⑩ 思給ふるー思給へる 37 ⑩ ふかく  
ーふかくつもり 40 ⑬ かきたるーかける 43 ② 給つるをー給へる  
を ⑥ たれもたれもーたれも 46 ⑤ おはしまさむーおはしまさまし  
⑨ 人のー人も 48 ⑬ 御心なりけりー御心なりける ⑭ うしろみ  
ー御うしろみ 49 ① けしきはみきこえ給ふーけしきはみたまふ 50  
⑮ よろつーナシ

これを『大成』につき合わせると、一つの顕著な傾向がうかがえる。

大系本に対する後陽成本（日大本と同質）の掲出異文18のうち大半（13）は「肖・三」に一致（27⑨・28・④・29⑪・31⑭・36⑩・46⑤・46⑨・48⑬・48⑭・49①）するか「三」のみに一致（28①・42⑥・48⑭）するのに対し、大系本は『大成』底本（池田本）に一致している。そして『大成』では「三」のみの単独異文と見える三例も、大系本「校異」では、「三」と等質である「後」は一つも単独異文でなく、「肖・三」と一致した一〇例ではなおさう同じだということである。すなわち、「三」（日大本）は、青表紙本系統とされる内部では、大系本底本とは対立しており、しかも「三」は孤立していないのである。第一の大きな傾向と言えるであろう。

次に、残る五例は、逆に大系本本文が『大成』青表紙本群の中で、ほとんど孤立しており、「三」が『大成』底本に一致している。ほとんど述べたのは、「28⑫は、君ーナシ」のみ、『大成』では「は、君」とある方が「肖」と一致しているからであるが、このことは、むしろ、「は、君」を有する本文が、河内本全本（五本）と別本すべて（四本）と同じである点に注目すべきであろう。似た例は「40⑬かきたる」が、『大成』別本の「陽・国」のみに、また、「50⑮よろつ」が河内本全本と別本の「国・陽・麦」にのみ見える本文である点にも指摘できる。ところで、あとの二例のうち、37⑩の「ふかくつもり」とある「つもり」を欠く本文は、『大成』・大系本「校異」の中には見えないので、あるいは大系本底本の誤脱の可能性がある。また「43②給つるを」は『大成』では全本の中で孤立しているが、大系本「校異」では若干の例を見ることはできる。し

かし「給へる」「給つる」の「へ」「つ」は、源氏に限らず物語の写本に接触すると、いずれに判読すべきか紛らわしい場合に遭遇することは屡々であつて、動揺しやすい異同である。すなわち以上を要するに、極めて少数の三例とは言え、第二の傾向は、大系本本文が青表紙本群の中で孤立している場合に、それが河内本や別本の一部に求められるということである。換言すれば、それらが混入している可能性がある、と考えられるのである。

第一の傾向は、大系本底本が、三条西家証本より『大成』底本に近いことを必ずしも意味しない。『大成』校異に示されている「三」の異文数は一〇一箇所であつて、大系本「校異」が対象としない音便や表記上の差異、補入・ミセケチなどの分を除いても七三箇所になるのである。そこで、大系本底本は、むしろ言うか、やはりと言うべきか、三条西家証本に近いのである。しかし、大系本底本桐壺には実隆自筆の奥書に「以青表紙証本」とあつたのである。『大成』底本との異同に比較して四分の一とは言つても、一八箇所の異文は両者が直接の書写関係にないことを確実に示しているのである。これは前節で奥書を比較吟味した結果と同じと考えて良いであろう。実隆で結びついていることはいるが、その枠内で、かなりの距離を有している点に注目すべきであろう。ただ、細かい書写関係となると、本文の異同を吟味するだけでは筋道がつけがたいのである。

『大成』底本も桐壺は池田本である。定家筆本に準じるとされる大島本でないのは、例証としていささかの憾みがないではないが、『大成』巻

末の「補正」により、明融本に底本を読み代えても、以上の異同傾向は全く変らない。それでも、桐壺は夢浮橋とならんで、書写に際して特別な扱いを受けてきた。その意味では源氏物語諸巻の本文傾向を見る上での一例証としては、適当な巻と言えないであろう。そこで次に、大系本第二冊目の最初の巻である須磨を、同じ方法で調査してみようと思う。ただし上述のように、ここでの大系本「校異」は「特に重要と思われるものだけ」であるから、必要に応じて、省略された校異をも補わねばなるまいが、まずは掲出の「後」との異同を列記する。

- 11 ⑫すみはなれなむことを―すみはなれなむことをおほすには  
⑭心くるしきはなに事にもすくれて―心くるしう ⑮おのつから  
へたつるをりくたに―よそくにあかしくらすをりくたに 12  
⑨なけきおほしたるさま―おほしなけきたるさまも 13 ⑤おほと  
のよにかくれて―夜にかくれておほいとのに 18 ⑪わらはへ―わ  
かきわらはへは ⑫いるを―出いるを 21 ①まきらはし給さま  
―まきらはし給へるさま 22 ①ことなしひにて―ことなしにて  
⑬さためおほせ給ふ―さためおかせ給 ⑯御よそひなとは―御よ  
そひなと 23 ⑩まうのほらせ給てさるへきものとしなくくはら  
せ給―まうのほらせ給 ⑪はなちるさとにも―はなちる里なとに  
も ⑭おもひ給へはつるほと―思はつる程の 24 ①思ひたまへ  
いつるのみなむ―思うたまふのみなん 25 ⑪しも人―しも人も  
26 ④まかり申給―まかり申し給ふ ⑦御ありさまの―御ありさま  
27 ⑫すくし給ぬへかりける―すくい給ひつへかりける 28 ②あれ

は―あらは 31 ⑧おほしやるに―おほしやるゝに 32 ⑨なくさめ  
又もとのことくにかへり給へきさまになと―おもひなきよにあらせ  
たてまつり給へと 34 ①うちなけかれ給ぬ―うちなかれたまひぬ  
⑫あらす―あらすと ⑭かきもらしてけり―もらしてけり 35 ③  
はるかなるへけれ―はるかなるへければ 36 ①おもひ給へらまし  
か―おもひ給へましかは 37 ③しみにしかたの事のみそ―しみにし  
かたそ 40 ⑦なくさめにけり―なくさみにけり 42 ⑭いとも物か  
なし―いともかなし 45 ⑩はなちやりたらむ―はなちやりたらむこ  
と ⑯まとひなん―まよひなん 50 ①おなしことなるかな―おな  
しことなにかことなる

須磨は桐壺の一・七倍ほどの長さなので、以上の校異三三箇所は、桐  
壺の一八箇所とほぼ釣合っているようであるが、こちらには省略がある  
ので、数量比はこの段階では意味がない。それより、桐壺と校異の質が  
随分と異なっていることに気付くであろう。一、二文字の異同が少くて、  
数文字に及ぶ例が多いのである。まず最初に掲出してある「11 ⑫すみは  
なれなむことを―すみはなれなむことをおほすには」では、大系本底本  
が「おほすには」を欠いている。次の「⑭心くるしきはなに事にもすく  
れて―心くるしう」では、逆にかなり長くなっている。大系本「校異」  
によると、前者で底本に異なるのは「湖・吉・穂・蓬・後・青・兼」の  
七本なので、同一であるのは「不・山」の二本であるが、「大成」にな  
ると、大系底本と同一本文を有する青表紙系の本は一つもなく、別本の「陽」  
が一致するだけである。また後者では、大系本「校異」での非共通・共



通が、前者と比較して「湖」のみが動く六本に三本の割合となる。そして、「大成」では青表紙本のうち、わずかに「肖」が大系本底本に一致するものの、やはり「陽」の「心くるしけさは何事にもすくれて」とある本文に酷似する点に注意が向くのである。要するに冒頭掲出の箇所に限っても、大系本底本は青表紙本として特異な本文を持ち、別本の陽明文庫本に親近性を示していると見られるのである。そこで「校異」省略部をも含めて比較するために、三条西家証本（日大本）と、伝実隆筆書陵部本（大系本底本）との、このあたりの本文を併記してみよう。「大成」三九五⑦より、大系本では11⑩に始まる一文である。私に句読点のみ加える。

○日本大学蔵三条西家証本

うき物とおもひすてつるよも、いまはとすみはなれなんことをおほす<sup>1</sup>には、いと<sup>2</sup>すてかたきことおほかるなかに、姫君の、あけくれにそへてはおもひなけき給へるさまの、心くるしうあはれなるを、ゆきめくりても、またあひみん事を、かならずとおほさんにてたに、なを一二日のほど、よそく<sup>3</sup>にあかしくらすおりく<sup>4</sup>たに、おほつかなき物におほえ、女君も、心ほそうのみ思たまへるを、いくとせそのほと、かきりあるみちにもあらず、あふをかきりにへたよりゆかむも、さためなき世に、やかてわかるへきかとてにもやと、いみしくおほえ給へは、しのひてもろともにもやと、おほしよるおりあれと、さるころほそからん海つらの波風よりほかに、たちましる人もなからんに、かくらうたき御さまにてひきくし給へらむも、

いとつきなく、わか心にも、中くものおもひのつまなるへきを、なとおほしかへすを、女君は、いみしからんみちにも、をくれきこえすたにあらはと、をもむけて、うらめしけにおほいたり。

○書陵部蔵伝三条西実隆筆本

うきものとおもひすてつる世も、いまはとすみはなれなむことを、さすかに、いとすてかたき事おほかるなかに、姫君の、あけくれにそへては、おもひなけきたまへるさまの心くるしさは、なに事にもすくれてあはれにいみしきを、ゆきめくりても、又みむことを、かならずとおほさむにてたに、なをひとひふつか、をのつからへたつるおりくたに、いかとおほつかうおほえ、女君も、心ほそうのみおもひたまへるを、いくとせそのほと、かきりある道にもあらず、あふをかきりにへたよりゆかむも、さためなき世に、やかてわかるへきかとてにもやと、いみしうおほえ給へは、もろともにもやしのひてと、おほしよるおりもあれと、さる心ほそからむうみつらのなみ風よりほかに、たちましる人もなからむに、かう、らうたき御さまにてひきくしたてまつらむも、いとつきなく、わが心にも、なかくものおもひのつまなるへきを、なとおほし返すを、女君は、いみしからむみちにも、をくれきこえすたにあらはと、おもむけて、うらめしけにおほいたり。

なお右の範囲では、日大本は、「大成」底本（大島本）と本文がほとんど一致し、わずかに「いみしういみしく（三五九⑬）」の違いがあるのみで、他は表記上の差異が見られるばかりである。すなわち、ここでは

同時に、大島本と書陵部本との異同としても、右の一箇所を除いて見ることが出来るわけである。『大成』と対比する便宜上、大系本の「校異」とは逆に、日大本を底本にして書陵部本の校異を示そう。

1 おほすにはーナシ 2 いとーさすかにいと 3 心くるしうー心くるしきはなに事にもすくれて 4 あはれなるをーあはれにいみしきを 5 あひみんーみむ 6 一二日のほとーひとひとふつか 7 よそくにあかしくらすおりくたにーをのつかへたつるおりくたに 8 おほつかなき物におほえーいかとおほつかなくおほえ 9 いみしくーいみしう 10 しひてもろともにもやとーもろともにもやしのひてと 11 おりあれとーおりもあれと 12 かくーかう 13 ひきくし給へらむーひきくしたてまつらむ

すべて一三箇所であり、大系本「校異」は音便の違いは示さない方針なので、9・12を除いた一箇所が実際の異同であるが、そのうち「校異」掲出は1・3・7のみであるから、他の八箇所が省略されたことになる。これによると三分の二強が省略されたことになるが、実際は、須磨巻すべてに両者の異同を求めると二一八箇所となるので、掲出分の三三箇所に比し、「校異」は七分の一弱に圧縮されたことになる。そして問題は数の多さもさりながら、内容に関してである。

結論から述べるなら、書陵部蔵青表紙証本の須磨は、『大成』校異に見ると、別本の、陽明文庫蔵鎌倉期書写本須磨に近い本文を有している。右の音便を除く一一箇所の異同のうち、5・13は書陵部本の孤立異文なので更に除くと、1・2・4・7・8・10が「陽」に一致し、3・6が

近似（『大成』は6の「陽」の校異を逸す。一二日のほとー一二日の陽とあるべき）している。すなわち、九箇所中八箇所が一致するか近似するのである。それに対し、他の本は著しく距離があつて、書陵部本は、まさしく別本と称すべきであるが、ただ注意すべきは3・6が、青表紙本系の「肖」に一致していることである。特に3は顕著な異文の一つと言え、これは、肖柏本に往々特異な本文を散見するという別な視点から考えるべき問題であらう。陽明文庫本の須磨が、別本としても極めて特異であることは、大島本との間に約一二〇〇箇所の異同があると報告<sup>注9</sup>されているのでも知られ、しかも河内本系統本とも違いのは、右の大系本九箇所の異文のうち、一つとして河内本との共通本文が見当らないことから理解できよう。勿論、書陵部蔵本が陽明文庫本と一致するわけではなく、左に例示した文の冒頭、「うきものとおもひすてつる世に」にしてからが、陽明文は「うとましき物とおほしすてつるよを」とあり、大系本底本との距離はあるが、『大成』掲出のもう一つの別本「御」よりは近いと言ふことができる。大系本の須磨は、青表紙本とは著しく異なる別本文のテキストである。

### 三

三条西家に発する諸本のうち、書陵部本須磨が青表紙本系本文でないのが明らかであるという立脚点に依れば、ことは三条西家本のみにかかわる問題ではなく、本文系統の区分に属するであらう。夙に岡野道夫氏は、三条西家証本（日大本）と書陵部本とを比較し、異同箇所が異文で

あるか、増文か脱文かを区別して、主に数量的に処理したデータを報告さ<sup>注10</sup>

れた。その結果、書陵部本が「本文的には、日大本の直接の親本とはいえないようである」と述べられているが、親本でないのは確実であつてもはや、青表紙系統でない巻が他にどれほどあるかを知ることが先決であろう。そして、本文的に青表紙本と確認できる巻々について、同系統本内での位置、ひいては三条西家関係諸本内でのゆれに調査を及ぼすべきであろう。この系統区分を容易にし、手掛りを求めうる資料が、さきの、大系本「校異」(特に第一冊)と、岡野氏の提示された異同箇所数の巻別の数値であろう。特に、各巻の両者相互に「(A)書入ヲ持ツ本文ノ相異箇所」総数を、その巻の丁数で割った「割合」、すなわち、その巻での一丁当りの平均異同箇所数の数値が日大本と書陵部本との異同傾向を端的にあらわしている。尤も、私が数えた須磨における「総数」は二一六であつたが、岡野氏の数値は(A)の一四と、「(B)書入ヲ持ツ本文ノ相違箇所」総数の二二〇を加えると多くなるが、これは異同の数えように依つても動く上に、果して(A)(B)の合計が私の数値とほぼ一致すべきであるかどうか、箇々の方法が詳かでないので、差異は問題にはできない。そこで(A)の「割合」の数値が多い順に二〇帖ほど配列してみよう。

玉鬘 (八・〇七) 柏木 (六・二九) 宿木 (五・二六) 梅枝 (五・〇〇) 行幸 (二・七〇) 匂宮 (二・四七) 藤裏葉 (二・一八) 蜻蛉 (二・〇六) 蓬生 (二・九七) 須磨 (二・八七) 乙女 (二・八四) 浮舟 (二・八二) 幻 (二・六六) 絵合 (二・五四) 賢木 (二・五二) 澤標 (二・五〇) 紅梅 (二・五〇) 薄雲 (二・

### 三四) 葵 (一・三一) 手習 (一・二五)

まず、四位までが飛び抜けて多いのに気付くが、玉鬘が特に多い。岡野氏は、一部の巻の本文系統にも触れて、玉鬘は「書陵部本」河内本の傾向が著しく強い。このことは、この巻の書陵部本の祖本が純粹の青表紙本系統の本文でなく、河内本の要素が強く混入した本文であることは疑いない」と言われている。その通りではあるが、むしろ、親本が河内本であつたとした方が正確であろう。玉鬘における日大本・書陵部本間の異同箇所数は、私の集計によると五六九(岡野氏の表では(A)四三六、(B)五六)で、そのほとんどが河内本系に一致している。ただ、わずかな問題がないわけではない。

大系本第二冊の「校異」には、凡例部分に次のような断り書きがある。「吉田本の玉鬘は河内本と見られる。この巻は元来、青表紙本・河内本・別本共に殆ど大同なのである。故に吉田本の玉鬘を採用した。」大系本「校異」では、対校本の一部に青表紙本でない巻が混入している場合に、校異を示さないのが原則だからである。そこで、この巻で原則を停止するほど諸本間の本文が「大同」であるかどうかは、「大成」校異に見て判断するほかはないが、そもそも、吉田本(吉田幸一氏蔵本)は河内本、書陵部本は青表紙本、という提示が正しくない。問題は三条西家青表紙本と比較しての段ではないので、「大成」底本と書陵部本との差異を見よう。乳母が玉鬘の帰京に腐心する条である。

仏神に願をたて<sup>1</sup>、なむ念しける。むすめとも、おのことも、ところにつけたるよすかともいきて、すみつきに<sup>2</sup>なり。心のうちに<sup>3</sup>

こそいそき思へと、京の事はいやとをさかるやうにへたゝりゆく。  
 ものおほしするまゝに、よをいとうきものにおほして、年三などし  
 給。廿はかりになり給まゝに、おひとゝのほりて、いとあたらしく  
 めてたし。このすむ所は、ひせむの国とそいひける。そのわたりに  
 も、いさゝかよしある人は、まつこのせうにのむまこのありさまを  
 きゝつたへて、猶たえすをとつれくるも、いといみしう、みゝかし  
 かましきまでなむ、大夫監とてひこのくにゝそうひろくて、かしこ  
 につけてはおほえあり、いきをひいかめしきつはものありけり。む  
 くつけき心の中に、いさゝかすきたる心ましりて、かたちある女を  
 あつめてみむと、<sup>10</sup>思ける。<sup>11</sup>(七二三④)⑬ 大系本334①⑩)

以下に傍線部の書陵部本との校異と、それに一致する本文を有する本  
 の『大成』略号を示す。

- 1 たてゝたてつゝ (河・国)<sup>別</sup> 2 よすかともよすか (河・陽麦)<sup>別</sup>  
 阿) 3 たたりけり (肖・河・陽)<sup>別</sup> 4 よを一身を (河・別) 5  
 おひとゝのほりてゝゝのひはてゝ (河) 6 いとゝいとゝ (河平)  
 鳳尾大) 7 いみしうナシ (河・陽保国)<sup>別</sup> 8 かしかましきまで  
 なむーかしかましきなかに (河・陽保)<sup>別</sup> 9 ひろくてーひろく (河・  
 保国)<sup>別</sup> 10 あつめてみむとーいかであつめてみむと (河・保麦阿)<sup>別</sup>  
 11 思けるーこのみける (河・保)<sup>別</sup>

「河」が、この巻では七本に及ぶ河内本系諸本共通の略号であるのは  
 言うまでもなく、大島本に対する書陵部本の異同一一箇所は、すべて「河」  
 に一致していると称して良い。加えて、別本群二、三と共通する場合の

多いのが注意される。青表紙本系ではただ一箇所、3に「肖」が見える  
 のみなのである。しかし、右の異文は、逆に見て、『大成』が「河」の共  
 通異文として掲出してある本文を漏らさず包含しているわけではない。  
 二箇所、「おのこともゝゝをのゝゝともゝ河」「し給ーをこなひ給河」と  
 あるのは大島本に一致しているが、それを以て書陵部本を、河内本に極  
 めて近い青表紙本、というように呼ぶことはできないであろう。子細に  
 『大成』校異を見れば、河内本系の一本づつに、それぞれ系統内で独自  
 異文があり、それが青表紙本本文と一致することは、めずらしくないか  
 らである。

大系本が河内本と認定している吉田本と書陵部本との異同を、大系本  
 「校異」に求めてみよう。「校異」は「重要と思われるものだけ」の上  
 に、私は吉田本を拝見していないので、それへの言及はできないが、両  
 者の関係は、この「校異」によつても浮びあがってくるのである。大系  
 本頁行数を省略し、一連番号のみで、掲出分の書陵部本→吉田本(「吉」  
 が「校異」内での単独異文である場合には・印)の校異を示そう。

- 1 とゝめたてまつり給はむもーとゝめたてまつらむも 2 うしろめ  
 たかるへしーうしろめたなかるへし 3 みたてまつりさしてーみ奉  
 りて 4 いひけるをーいひかゝるを 5 三十一四十 6 わか君をは  
 ーあか君をは 7 よまゝほしかりければーよまゝほしければ 8 ひ  
 さしうナシ 9 おもふかたのーおふかたの 10 ふなこともーふな  
 こ 11 すてゝつーすててつ 12 なきをはゝおとゝーなきをはお  
 とゝ 13 ひとりのーひとゝころの 14 いみしきーナシ 15 もろこし

にたにーもろこしにも 16 めくみたてまつり給てむーめくみたてまつりてん 17 おはせましかはーおはせは 18 女房ー女は 19 かちあゆみーかちあゆみは 20 わか君はいかゝなり給ひにしーナシ 21 みなおはしますーナシ 22 へたて給つるーへたてまとひつる 23 おはしまさむところーおはしまし所 24 うつきのゝしーうへにうちきの25 すこしあしなれたるーあしすこしなれたる 26 たつねかはしたれはーたつねかはしいひたれは 27 をとこともをはーをとこともを28 すりやうのーナシ 29 御ためにー御ためにさたまりて 30 しらせたてまつり給へーしらせたてまつらせ給へ 31 おひいて給にけむーおひ出給けん 32 みたうーみてら 33 いひかはすもーいひかよはすも 34 すき侍れとーすきはへりぬれと 35 おひまさりて見え給しかーおひまさり給しか 36 おやめき給ーおやめきての給 37 ちきりとなむーちきりともなん 38 たてまつれ給ー奉り給 39 きこえ給たるへしーきこえ給なるへし 40 きこえりてむーきこえいてめ 41 御ふるものあつかひかなー御ふるものあつかひともかな 42 なほうちあはぬーなほくてあらぬ 43 ひきよせてー引よせ給て 44 かゝる物ーナシ 45 御さまかたちさへー御かたちさへ 46 てうしたるをもーてうしたるを 47 おり物ともーナシ 48 みそひつそのさまの御はこーみそひつのさまの御はこ 49 たてまつれ給をーたてまつり給を 50 ゆるきたまはぬーゆるきまよはぬ

以上五〇の異同箇所を『大成』に徴すると、次のような傾向がうかがえる。まず、いずれが河内本本文に一致するかを、対校の河内本七本中

五本以上に共通する場合の本文に限定して比較すると、書陵部本二(1) 2 6 7 13 14 16 17 25 30 33 35 36 37 38 39 41 44 45 48 49) に対し、吉田本も二(3) 4 5 8 15 18 19 20 22 23 26 27 28 29 32 34 40 42 43 46 47 50) と、ほぼ同数である。ただ内容的に見ると、書陵部本は、青表紙本すべてとも一致する本文である場合が多く、そうでない例は八(14 16 36 38 39 41 44 48) に過ぎないのに、吉田本では逆に、青表紙本とは一致しない場合が多く、一致するのが四(3 4 26 34) と僅かなことである。それぞれに別本と共通本文を併せ持ったりはするが、両系統本本文に限ってみると、書陵部本は河内本でもあるが青表紙本でもある例が二一の内一三を占めるのに対し、吉田本は二二の内に四にとどまるのが、見掛けの上で、河内本寄り、乃至は河内本と認定させてしまうのかも知れない。しかし、たとえ青表紙本と一致する河内本本文であっても、書陵部本がそれに従っていることは、その箇所に関して吉田本が河内本本文でないことを示す事例であり、ひいては青表紙本でもないもので、そこは別本本文ということになる。要するに両者とも(吉田本は大系本「校異」に拠る限りにおいて)、青表紙本文に対して五〇〇余の河内本の特色を示す共通異文を有する中で、十数箇所の範囲で、書陵部本が青表紙本にゆれ、吉田本が別本にゆれていると言え言えるのである。従って、ゆれはわずかと言うべきであつて、吉田本を尾州家本に置き換えて比較してみても同じである。書陵部本玉鬘には、河内本諸本の多くに見られるような、「句ヲ切ル」朱の句読点や振漢字などはないが、やはり本文は河内本と認定すべきであろう。実隆主催による寄合書という、「青表紙証本」の粧いを持った河内本であつて

見れば、形態的な河内本の体裁を備えていなくて当然である。この巻の写し手が見た本そのものと断定はできないが、祖本が河内本であることは疑いがあるまい。

#### 四

本稿は、大系本文の検討を主たる目的としていないので結論を急ぐと、更に勾宮が河内本系統に数えられ、梅枝・柏木・寄木の三帖が別本と認定すべきで、これらが青表紙本系統の本文と言いたいことは、以上の結果と同様である。それぞれの本文の一部か、あるいは異同箇所のみを示して簡略に指摘することとしたい。本文は「大成」底本を掲げ、書陵部本との異同と、共通本文を有する「大成」校異本の略号とを注記しておく。なお、表記・音便の差異は省略する。

#### 梅枝

二条院のみくらあけさせ給て、からのものともとりわたさせ給て、御らむしくらふるに、にしき、あやなとも、猶ふるき物こそなつかしう、こまやかにはありけれ、とて、ちかき御しつらひの、もの、おほひ、しきもの、しとね<sup>2</sup>などの<sup>1</sup>はしとにも、故院の御よのはしめつかた、こまうとのたてまつれりけるあや、ひこんきともなど、いまの世のものにす、なをさま<sup>3</sup>御らむしあてつ、させ給て、このたひのあや、うすものなどは、人々に給はす。かうともは、むかしいまの、とりならへさせ給て、御かた<sup>4</sup>にくはりたてまつらせ給。ふたくさつ、あはせさせ給へ、ときこえさせ給へり。をくり

もの、かんたちめのろくなと、世になきさまに、うちにもとにも、<sup>6</sup>ことしけくいとなみ給にそへて、かた<sup>7</sup>にえりとへのへて、かなうすのをと、み<sup>6</sup>かしこまましきころなり。「大成」九七五⑤⑭ 大系本159⑨⑩160⑤

#### 〔校異〕

1 とりわたさせーわたさせ（ナシ） 2 などの<sup>1</sup>はしとにもにーなにかのものゝく<sup>3</sup>なとやうのれうに（ナシ。cf なにかのものゝく<sup>3</sup>保<sup>別</sup>） 3 なをーすくれたるなと（ナシ） 4 いまのー今のと（保<sup>別</sup>麦阿） 5 給てー給つゝ（保<sup>別</sup>） 6 ことしけくーしけく（河・陽保<sup>別</sup>麦阿） 7 えりとへのへてーかうともえりとへのへて（肖・河・陽保<sup>別</sup>桃）

他に例を見ない異文「（ナシ）」が多い。「河」（五本）と一致する場合もあるが、「河」の側から見れば、そう一致しているわけではなくて、むしろ別本の「保」に近い本文と言えるであろう。なお、ここでは7に、青表紙本系の「肖」が、「河」や、別本の一部に共通する異文を見せている。

#### 柏木

ひとよなやみあかさせ給ひて、日さしあかるほとにうまれたまひぬ。おとこ君ときゝ給に、かくしのひたることの、あやにくにいちしるきかほつきにて、さしいてたまへらんこそ、くるしかる<sup>1</sup>へけれ。女こそなにとなくまきれ、あまたの<sup>2</sup>人の<sup>3</sup>みる物ならねは、やすけれとおほすに、又<sup>4</sup>かく心くるしきうたかひましりたるにては、心やすき<sup>5</sup>方にも<sup>6</sup>のし給もいとよしかし。さてもあやしや。わか世とゝに、

おそろしと思しことのむくひなめり。この世にて、かく思かけぬこ  
とにむかはりぬれば、のちのよのつみも、すこしかるみなんやとお  
ほす。人はたしらぬことなれば、かく心ことなる御はらにて、すゑ  
にいておはしたる御おほえいみしかりなると、思いとなみつかうま  
つる。御うふやのきしきいかめしう、おとろくし。御かたくさ  
まくしにいて給御うふやしなひ、よのつねのおしき、つかさね  
たかつきなどの心はえも、ことさらに心くいにましきみえつゝ  
なむ。〔大成〕一二三⑫⑬四⑧ 大系本18⑭⑮19⑨

〔校異〕

1くるしかる―心くるしかる(河・御<sup>別</sup>) 2あまたの―あまた(ナ  
シ) 3みる物ならねは―みぬ物なれば(国<sup>別</sup>) 4又―ナシ(国<sup>別</sup>)  
5ものし給も―ものし給にそ(ナシ cf ものし給そ<sup>別</sup>国<sup>別</sup>) 6よし  
かし―やすきかし(ナシ) 7この世にて―この世に(国<sup>別</sup>) 8こ  
とに―事にて(保<sup>別</sup>) 9むかはりぬれば―むかはりきぬれば(ナシ  
cf いてきぬれば<sup>別</sup>国<sup>別</sup>) 10つみも―つみは(肖・保<sup>別</sup>国<sup>別</sup>) 12かるみ  
なんや―かるむらんや(ナシ cf かるむや<sup>別</sup>国<sup>別</sup>) 12おとろくし  
(ナシ) 13心はえも―心はへなとも(ナシ) 14心く―に―心く  
(榊陽肖三・河・御麦阿<sup>別</sup>) 15みえつゝなむ―見えつゝ(ナシ)

この巻でも他に見ない異文の多いのに気付くが、15などは誤脱かとも  
思われ、大系本も「なん」を補っている。12の「おとろくし」は補っ  
ていないが、これを欠くと、「御うふやのきしきいかめしう、御かたく  
さまにしいて給御うふやしなひ」となつて、いささか落ち着かない。こ

のあたりでは、他本にあつて書陵部本に欠く語が散見されるようで、例  
示した文の直前にある「けむさなとめし、みすほうはいつとなくふたん  
にせらるれば、そう、ものなかにけむあるかきりみなまいりて、かちま  
いりさはく」(大島本)では、書陵部本が「けんさなとめし、みす法はい  
つともなくせらるれば、はむそうとものなかに、けむあるかきりみなま  
いりて、加持まいりさはく」とあつて、圈点部に異同があり、大系本は  
底本に加えて「不断」を補っている。これらがみな誤脱とはいひ切れ  
ないが、他本にはすべてあるのと、文意との両面より考えれば、そう推  
定するのが穏当であろう。なおこの巻では、別本の「国」との共通異文  
の多いことが注意される。

句宮

源氏物語は、総じてあとの巻になるにつれ、青表紙本・河内本両系統  
本文の異同が少いと言えるが、それでも、異文の分布は截然としていて、  
両者は区別できる。そこで句宮一帖は、いたずらに長い文を引用するよ  
り、異同部分のみを示した方が効果的と思われるので、「大系」の下二桁  
の頁数と行数とに従つて、それらの第五頁までの例を示す。

二九①たてまつらんは―たてまつらんことは(河) ②三宮―三宮  
と(河・保言<sup>別</sup>) ⑦よりも―よりは(河・保<sup>別</sup>) ⑧きこえ給し故―給  
しゆゑに(河) ⑫兵部卿―兵部卿宮(肖三・河・別) ⑬六条院  
―六条院の(肖・宮・麦阿<sup>別</sup>) ⑭まの―まの(ナシ) ⑮御さう  
しにしたまふて―御さうしにて(河・保言麦阿<sup>別</sup>) 三〇④世の人も  
―世人も(池肖三・河 cf 人も<sup>別</sup>麦阿<sup>別</sup>) ⑦御けしき―御けしき

の(河) ⑧その比のーナシ(ナシ) ⑩うつろひ給しにーうつろ

ひ給にしに(三・河・麦<sup>別</sup>阿) ⑪御そうふむ所ー御そうふむの所(河・

麦<sup>別</sup>阿) 三二①なこりもーならいも(為<sup>河</sup>櫛池肖三・河・飯) ④給

てなむー給て(ナシ) ⑤のゝしるゝのゝしりし(横櫛池肖三<sup>河</sup>宮)

三三②まなしーまもなし(横池<sup>別</sup>飯麦阿) ②花のさかりはーさく

らは(河<sup>別</sup>保言) ③給へりしまゝにーたまひしまゝに(河・保<sup>別</sup>)

④おほさるゝまゝにーおほさるゝに(池肖三・河) ⑨御きしきー御

けしき(為<sup>河</sup>池三・河) ⑪給つゝー給て(河・保言<sup>別</sup>) 三三①月の

一月ことの(横為<sup>河</sup>櫛池肖三・河・保言飯) ③かへりてーかへりて

は(横池肖三・河) ④宮達もー宮たち(ナシ) ④御あそひかた

きーあそひかたき(ナシ) ⑤いとまなくーいとなく(宮尾大鳳<sup>河</sup>)

⑥給けるー給けり(ナシ) ⑥をさな心ちにーをさなき心ちに(河)

⑨せんけうたいしーくたいし(河) ⑩けんーける(河) ⑬御

道心にてかー御道心にか(御尾大鳳<sup>河</sup>)

右の三三箇所のうち、六箇所は書陵部本の孤立異文「(ナシ)」である

から除くと、残り二六箇所の中で二一箇所に「河」との共通異文を見る。

そしてこれに、更に河内本系諸本のいくつかと一致している箇所をも加

えると、ほぼ全部(例外は一箇所)が共通異文となる。これは逆に、「大

成」に「河」として校異が示してある箇所を以て書陵部本を検しても同

じて、ほとんど漏れているところがない。青表紙本系や別本の中で、時

に河内本系本文と一致している例もあるが、それぞれの本の側より逆に

検するなら、相違のみが目立つてくる。また、そうした共通異文数の

問題ばかりでなく、異文が、転写上の過誤により生じたとは思われない  
内容が幾つかあり、特に「花のさかりはーさくらは」せんけうたいしーく  
いたし」の対立は決定的と言つて良い。まさに書陵部本の句宮は、河  
内本系統に属さしめるべきである。

#### 寄木

心さまいとよくおとなひ給て、母女御よりも、いますこしつしや  
かに、おもりかなる所はまさりたまへるを、うしろやすくはみたて  
まつらせ給へと、まことには、御はゝかたとても、うしろみとたの  
ませ給へきをちなとやうの、はか／＼しき人もなし。わつかに大く  
ら卿すりのかみなといふは、女御にもことはらなりける。ことに世  
のおほえをもちかにもあらず、やんことなからぬ人／＼を、たのも  
し人にておはせんに、女は心くるしき事おほかりぬへきこいとお  
しけれ、なと御心ひとつなるやうにおほしあつかふも、やすからさ  
りけり。御まへのきくうつろひはてゝさかりなるころ、空のけしき  
のあはれにうちしくるゝにも、まつこの御かたにわたらせ給て、む  
かしの事なと聞えさせ給ふに、御いらへなともおほとかなるものか  
ら、いはけなからすうちきこえさせ給ふを、うつろしくおもひ聞え  
させ給。(大成) 一七〇二⑩③⑥ 大系本 34⑮③ 35⑨

#### (校異)

1 心さまー御さま(阿<sup>別</sup> cf 御心さま 三・宮保国桃) 2 所はーけ  
しきの(保桃<sup>別</sup>) 3 まことにはーまことは(ナシ) 4 はか／＼し  
きーはか／＼しー(ナシ) 5 けるーけり(保<sup>別</sup>) 6 人々をー人を(陽<sup>別</sup>)



7 おはせんに―物したまはむも(保桃) 8 けしきの―けしきも(保桃)  
 桃) 9 御いらへなともおほとかなるものからいけなからす―お  
 ほとかなる物からいけなからす御いらへなともうちきこえ―(ナ  
 シ cf おほとかなるものからいけなからす御いらへなときこえ  
 保)

右の例のみでも一端は知られるが、別本の「桃」との親近性が、かなり顕著である。右を除いて『大成』第五ページまでの異同を、下一桁の頁数と、行数とを表示することで列記してみよう。

一①左大臣殿―左のおほい殿(陽保) ⑨たくひなきもの―たくひ  
 なきさま(河・陽保阿桃) ⑬このみ―このみて(陽桃) ⑭御裳  
 きせ―御裳きせさせ(肖・国) 二①さまにと―さまに(肖) ②  
 たりける―ける(桃) ②たからものとも―御たからものとも(桃)  
 ④うちにも―うへにも(ナシ cf うへも―保) ⑤殿上人とも―う  
 へ人も(ナシ cf うへ人とも―河・阿、うへ人―保) 三⑥御さま  
 を―御さま(ナシ) ⑧おほしめし―おほし(宮桃) 四②もたり  
 て―もたりとて(肖三・桃) ②事―ことと(保桃) ⑤殿上に  
 は―殿上に(保) ⑥こなたへ―こなたに(河・陽保阿桃) ⑩た  
 はふれにて―たはふれにても(肖・桃) ⑪ならしまつはし―なら  
 し(ナシ) ⑪ならひにたれば―ならひたれば(ナシ) ⑬いと・  
 いと(桃) 五⑨ひしりのもの―ひしりの(肖、但「ひしりの  
 よのもの」) ⑪右大臣―左のおほい殿(桃 cf 左大殿―肖、左大  
 臣との―三) ⑬ほかの―ほかなる(河 保阿桃)

「保」をはじめ、他の別本と共通異文を持つこともあるが、やはり「桃」が多い。そして、これと書陵部本とは、本文上重なり合うことが屢々見られるのである。また、ここでも「肖」が、青表紙本系諸本の中では孤立(時に「三」と共通)して、別本の一、二と同じ本文を見せているのに注意すべきであろう。

かくして、書陵部蔵の三条西家本青表紙証本のうち、玉鬘と勾宮とは河内本系統、須磨・梅枝・柏木・寄木は別本に属さしめるべきであると思う。すなわち、全巻の一割を越える六帖が青表紙証本はおろか、その系統本とも言えないのである。たとえ奥書が由緒ある成立を伝えていても、源氏のような巻数の多い揃い本は、巻ごとの精査が必要であると痛感せざるをえない。『大成』を通覧すると、底本と「三」との距離が巻により随分と動揺する。時には、質量とも青表紙本・河内本両系統本文間の異同を凌駕するほどの巻がある。これが何を意味するかは、青表紙本の成立過程をさまざまな見地から吟味し直すよりほかはなく、異文数の多寡も目安にはなるが、そののみによつては論じきれない。これに関しでは稿を改めて考えたいと思う。

## 五

元禄十三年(一七〇〇)九月二十七日、関白近衛基熙は、一念発起して源氏物語の書写を開始した。かねて本文は青表紙本の証となるべき本が良いと考え、年を累ねて求めていたのになかなか得られないでいたが、「前平中納言嘯月」(平松時量)の写した本を借覧して、その奥書の子細

に見ている内に、自分の常に握翫すべき本であると覚ったという。時に基熙五十三歳、そこで彼は、最も部厚い若菜上よりとりかかった。墨付紙数一二八枚のこの一帖は、ひと月を経て十月二十八日写しおえた。その日のうちに若菜下に着手する。これも一二四枚、長丁場である。今度は三か月を要して、翌年一月三十日に終った。即日、今度は巻を隔てて総角一一八枚に手を染めたが、はかどること更に遅く、遂に十一月十四日に至った。翌十五日より宿木一二二枚、勿論、年を越して、元禄十五年六月八日に終了した。後半は奮起したのであるうか、この年の内に、東屋（八八枚）、夕霧（八八枚）、手習（九一枚）、柏木（五一枚）と写した。

元禄十六年正月五日、新年を迎えた改まった気持で、基熙は桐壺と向い合った。長い巻々を先に写したのは、挫折を避ける用意であつたのだろう。桐壺（三三枚）は丁度十日間で写しあげた。次は帯木である。その後の書写は、およそ巻序に従って進められ、野分にさしかかつて、再び年が改まった。元禄十七年は三月十三日に宝永と改元されたが、作業は順調に進められ、同年五月十八日に始めた夢浮橋の書写が二十五日に終ったことで、ここによりやく一部の功をおえた。四年近くの歳月を要したことになる。しかし基熙は心をゆるめなかつた。その日のうちに親本との校合を独り開始したのである。桐壺は三日、帯木は五日という速度である。最初に写した若菜上を校合している途中で、宝永二年を迎えた。長い巻の上に速度も落ちてきて、七十日余かかった。それでも営々と校合は続けられ、遂に九月十五・十六日の二日間で夢浮橋を見おえる

と、書写・校合が完成したのである。満五年を要したが、それらを自分独りで成しとげたことに基熙は感慨なきをえず、九月十九日、夢浮橋に識した奥書の中で「歎喜々々」と謳い、

たのまれぬ身とはしりつゝ、わたりきて今日までは見つゆめのうき橋と書きつけた。

基熙が若菜上より写し始めたのは、前述のように、つらい作業を先にした方が、途中で挫けないで済む、と考えたからでもあろうが、もう一つ理由があつたと思う。基熙の父近衛尚嗣も、かつて源氏物語一部の書写を志し、正保二年（一六四五）五月一日、帯木より着手したとおほしい。桐壺は、宸筆を奏請する心づもりではなかつたかと思うが、巻序通りに写していき初音の巻のあと少し中絶したが、また再興し、常夏を写している時に年が暮れた。そして、五月十六日に開始した若菜上は七月二十三日に写し終ったものの、それ以降は書き続けることができなかった。この人はとかく病弱であつて、時に二十五歳、七年後の承応二年（一六五三）七月十九日に薨じた。慶安元年三月六日に生まれた嗣子の基熙は、六歳で父と死別したのである。尚嗣の遺した柙型の源氏物語は、各帖とも仮に糸で括りをとめているだけで、一帖ごとに楮紙に包み、その上書に書写の記録を記している。基熙は、父の書きさした源氏三十三帖を見て、その無念を思い、最後の巻となった長い若菜上より染筆したのではないか、という推定である。

基熙が源氏の諸注を集成し、ある人のための講釈に備えて一貫集七十三巻を執筆し始めたのは、右の書写・校合をおえた七年後、正徳二年（一

七二二) 八月九日のことである。自筆草稿が陽明文庫に伝わっているが、源氏物語に造詣の深い基熙が平松時量所写本の奥書を子細に見て、これこそ青表紙証本と思つたのは、一つにはそれが三条西家証本(日大本)の写しであり、更には、後陽成天皇宸翰本の写しでもあつたからである。時量は、寛文四年(一六六四)五月三日に、新院(後西院)御本である宸筆本を以て、一部五十四帖を写しおえたのである。基熙の祖父、すなわち尚嗣の父信尋が、嗣子のない信尹の養子となつた御陽成院の第四皇子であることは知られるところで、基熙にとつて、血筋の上で後陽成院は曾祖父に当る。今に書陵部に蔵するこの宸筆本には、夢浮橋に院の次のような奥書が見られる。

以三条西家伝之証本令謄寫了

慶長十九稔仲春中辭

從神武百餘代孫太上天皇(花押)

この奥書は大系本第五冊の口絵に掲出されているので、容易に書影を目にすることができる。そして後陽成院の書写奥書の前に、日大本にある実隆の本奥書が写されているのである。すなわち、三条西実隆が享祿四年に家本として完成させた本を、慶長十九年に後陽成院等の寄合書で臨写し、その、後陽成院本が後西院に伝領されていたのを、寛文四年に平松時量が更に臨写し、ここに再び近衛基熙が書写したのである。後陽成院奥書は、「三条西家伝之証本」と、現在の日大本を呼称している。この本文を青表紙本系統の中でいかに位置づけるかは今後の課題であるが、これらの写し手たちが、三条西家が伝える証本が青表紙証本であり、ひ

いては源氏物語の本文として最も信すべき本と確信していた様子がうかがえるであろう。

陽明文庫には、右の尚嗣や基熙の書写本を含めて、源氏物語の揃い本乃至は若干帖を欠いた源氏物語の写本が十部と、他に零本数帖が蔵されている。特に陽明文庫本として著名なのは、鎌倉時代書写の揃い本で、数帖の江戸時代補写本を含みはするが、別本を中心に、両系統本の鎌倉期の特色のある本文を伝えている。つとにこれは『大成』にも対校本の一つに略号「陽」として採用されている上、先年、影印本・翻刻本が刊行<sup>注11</sup>された。従つて、それらに加えられた諸家の解題(私も一冊担当)と併せて、詳細な紹介がなされているが、他の所蔵本については、従来、ほとんど言及<sup>注12</sup>されることがなかった。これらの中には、実隆を含む寄合書で、日大本とも関連するふしのある伝本も見られ、他は室町・江戸時代の公卿・連歌師の筆になるが、ともかく五撰家筆頭の近衛家当主も折々にみずから書写し、この撰関家に所蔵され続けてきた写本群には、源氏物語伝来の一つの相が見られる。今回、これら諸本の閲覧・調査の機会を得たので、まずは、鎌倉期写本について書写年代の古い、室町時代中期書写の寄合書より紹介する。

## 六

(一) 陽明文庫蔵後柏原院宸筆等本

写本、列帖装、五二冊(早蕨・夢浮橋二冊欠)。縦一七・三、横一七・五センチ。表紙、楮素紙無地、褐色を帯ぶ。見返し、本文と共紙。本文

料紙、楮斐交漉。外題は表紙中央に打付書で「きりつは」「は、木、」「う  
つみせ」「手ならひ」とあり、内題はない。なお勾宮の外題は、異名の  
「かほる中将」とある。本文は毎半葉十行書写。いずれも前付遊紙を一  
枚（扉紙）おき、次葉表より本文を写して、後付遊紙は〇〇四枚。本文  
丁数は、桐壺（三五）、帚木（六七）、空蟬（二七）〇若菜上（一四四）、  
若菜下（二五二）、柏木（五二）〇浮舟（九四）、蜻蛉（六七）、手習（八  
三）などである。扉紙右上には、桐壺には欠くが、極細の朱墨の文字で  
源氏の年令を記す。帚木では、「ハ、十六才」、以下「ウツ 十六才」  
「ユフ 十六才」「若 十七才」「スヘ 自十七才至十八才」「モ 十七才  
至十八才」などである。また、各巻のほとんどが、この位置に極札風の  
小短冊を貼り、「青蓮院宮<sup>キリツホ</sup>」「飛鳥井雅俊<sup>ウツセミ</sup>」「逍遙院<sup>ユフカホ</sup>」などと筆  
者名を記し、それを欠くのは帚木・若紫・賢木・澤標・絵合・胡蝶・螢・  
篝火・真木柱・藤裏葉・鈴虫・御法・椎本・東屋の一四帖である。ただ  
し、勾宮に「後柏原院<sup>サフラヒ</sup>」とあるのは、失われた早蕨のものが、誤り貼  
られたのであろうが、他に後柏原院を筆者とする花宴など五帖とも同一  
筆跡なので、勾宮も同一人物と見て良いであらう。

書写奥書は、夢浮橋が失われているためか、見ることはないが、各尾  
丁裏左端に「一校了」「校了」と極く細小の文字で書かれているか、同じ  
意味かとも思われる〇印を書くのが常であるが、玉鬘・篝火・野分・若  
菜上・橋姫・椎本には、これを欠いている。また花宴には「一校了」の  
下に同筆で

件本以京極黃門<sup>定家卿</sup>自筆校合畢<sup>云</sup>、

とある。まさにこれは、日大本花宴の第一六丁表に

<sup>本肖柏筆</sup>  
以京極黃門<sup>定家卿</sup>自筆校合畢<sup>十六校</sup>

とあるのと同文である。日大本では更に第十六丁裏に

享祿三年正月十九日書写之了

奥入以別希写之 三月廿八日一校了 桑門堯空<sup>七十六歳</sup>

という実隆の書写奥書を見るので、陽明本が一枚に用いた本は享祿三年  
書写本ではなく、その親本であらうか。陽明本花宴にまず「一校了」と  
あるのは親本を見直したことで、それに続いて右の奥書が見えるのは、  
加えて定家自筆本との校合をしたからである、とする推定を、字句の上  
からは可能にしないでもないが、約一文字分あけたのみで一息に書かれ  
ているので、やはり、親本の奥書を写しておいたと考えるべきであらう。  
これら本文については後述するが、陽明本花宴はむしろ定家筆臨模融  
本に近く、傍記する異文は日大本に近い。

巻により異なりはするが、この陽明本には墨による異文注記のほか、  
朱の合点・句読点のいずれかか、双方があり、明石では一箇所であるが  
声点が増えられている。しかし、本文への朱を見ない巻も二五帖と、ほ  
ぼ半数に達し、桐壺・花散里を例外として、それは朝顔以降に片寄って  
見られる。特に朝顔より鈴虫までの一九帖では、玉鬘と若菜上にわずか  
な朱の合点を見るのみであるのが注意される。朱の合点は、青表紙本に  
本来あった奥入とも関連すると考えるからであるが、これについては別  
に述べたい。

付属文書として、包紙の上書に「源氏物語筆者之目録」と題する折紙

一通がある。

きりつほ

青蓮院宮<sup>尊鎮</sup>

はゝ木ゝ

うつせみ

飛鳥井雅俊

夕かほ

逍遙院

わかむらさき

すゑつむ花

滋野井教国

と以下続くのであるが、筆者名の空欄になっているのが、ほぼ、扉紙に貼り付けてある筆者名小短冊が剝落して失われた巻なので、この目録が小短冊によつて作成されたと推測させる。そこで、失われた早蕨の小短冊を誤り帖られた匂宮は、誤りを踏襲した可能性が強いが、上述のように、両者は同一筆者と見られるので、結果として誤りがないと思われる。目録の呼称（橋姫のみ小短冊による）に基いて各人の筆写したという巻名を示しておく。

青蓮院宮<sup>尊鎮</sup>（桐壺）、飛鳥井雅俊（空蟬）、逍遙院（夕顔・明石・胡蝶・柏木・総角）、滋野井教国（末摘花・蜻蛉）、姉小路濟俊（紅葉

賀・須磨・乙女・行幸・夕霧・椎本）、後柏原院（花宴・花散里・蓬生・関屋・朝顔・匂宮・早蕨・夢浮橋）、中山宣親（葵・薄雲・宿木）、後法雲院左大臣公興（落標）、中御門宣胤（松風・若菜上・若

菜下・浮舟）、西室僧正（玉鬘・竹河）、伏見殿南御方（初音・幻）、故長橋局<sup>基綱御女</sup>（常夏・篝火・鈴虫）、甘露寺一位<sup>元長</sup>（野分・手

習）、飛鳥井雅康（梅枝）、故入道宮（藤裏葉）、万松宗山（紅梅）、

### 中御門宣秀（橋姫）

筆者名不詳の帚木・若紫・賢木・絵合・螢・真木柱・御法・東屋の八帖を除いた四六帖（うち原本二帖欠）は十七人の寄合書であるとされている。書写帖数が複数の人は、後柏原院（八帖）、実隆・濟俊（各五帖）、長橋（四帖）、教国・宣親・宣胤（各三帖）、公順・南御方・元長（各二帖）で、十七人の中には「故」を冠している人が二人いる。入道宮に小短冊は失われているが、長橋は「こなかはし」「故なかはし」とあるので、これが帖られた段階で、すでに故人となっていたのであろう。目録の古さや、本体の推定書写年代からして、これらが筆者である信憑性は高いと思われるが、いささかの不審がある。生没年が確定できる中の、没年の最も早いのは教国（一四三〇～九六）で、生年の遅いのが濟俊（一五〇五～二七）である。ついで後柏院皇子の尊鎮（一五〇四～五〇）も一年差である。つまり、二人は教国の没後八、九年経って生まれているのであるから、筆者が目録通りであると、同じ時期に写される筈がないことになる。また梅枝は、本文の奥に別筆で「雅康筆」とも書かれているが、大島本の筆跡とは隔りがあり、筆者確認には、なお精査を要するであろう。

本文は五十二帖すべて青表紙本系統であるが、巻により若干のゆれがある。試みに各巻の『大成』第一頁分を底本と校合する方法で、特に「三」との親近性を中心に調査すると、およそ次のようである。行数のみ示す。

桐壺

④心をのみー心を（肖三・陽国）<sup>別</sup> ⑥おもほしてーおほゝし

て（肖三）

⑬いたうおとらすーおとらす（肖三・国）<sup>別</sup> ⑭うしろ

みし—御うしろみし(肖三) 以上、肖三に極めて近い本文である。

帚木 ①おほかなるに—おほかなる(おほかなるに—秀・国) ②御とのるところに—御とのところの(松池三・河・別) 以上、

資料不足ながら、「⑪うらめし—うらめしと(池秀三)」とは一致しないので三に近いとは言えず、むしろ大島本との異同が少ない。

空蟬 ①まゝには—まゝに(横池肖三・河・別) ④さま—ナシ

(秀、cf さま—三) ④かよひたるも—にかよひたるも(秀肖三・

河・麦阿桃 ⑩よきほとに—よきほとにて(御横池・河・陽麦、cf

よきほとに。—三) ⑪おほし—おほしめし(おほしめし—ナシ)

⑫おもほし—おもほし(肖三) ⑭おりみて—おりをみて(池秀肖三・

河) 以上、やや肖三に近いが、「⑥まつはさす—まとはさす(横肖

—まとはさす(三)」は一致しない。

夕顔 ④程—程に(程に—ナシ) ④みはたし—見わたし(御横池

榊池肖三) 以上、異同乏しく判然としないが、「⑩やうなる—やう

なるを(肖)—やうなるを(三)」など一致しない。

若紫 ④心みさせ—こゝろみ(池三) ⑨ありさま—ありき(ナ

シ、cf 御ありき—河) ⑭いかて—いかてか(榊池三) 以上、資

料不足であるが、やや池三に近い。

末摘花 ③うちとけたりし—なつかしかりし(池肖三・河・別) ⑦

こそ—こそは(横池肖三・河・別) ⑪ける—けり(横池肖三・御)

以上、肖三に近いようでもあるが、「①をくれし—をくれしほと(池

肖三) ⑥とゝめ—とまり(池三) ⑭大貳の—大にのあまきみの

(池三)の著しい異同は底本側であり、結局、三に近いとは言えな

い。 紅葉賀 ③中將は—中將(中將—横池・河・御) ⑭ける—け

り(横池陽池肖三・御氏) 以上、資料不足ながら、「⑤を—ナシ(三)

⑬心の—心(肖三)」は三と一致しない。

花宴 ②おはするを—おはする(ナシ) ⑩はつかしく。(はつか

しくて—三) ⑫なれたるも—なれたるを(なれたるを—ナシ) ⑬

なるほと—程。(ほとに—宮 ほとに—三) 以上、前述した通り、

対校本に三に近いものを見る。

葵 ⑤大将の君に—大将の君(ナシ) ⑩ひめ君—ひめ宮(横池

肖三・海・別 cf 七宮尾大) ⑫おほしけり—おもほしけり(肖

⑭齋宮をも—齋宮も(ナシ cf 齋宮をも—陽) 以上、肖にやや近

きか、資料不足。

賢木 ⑤そひくたり—そひてくたり(横池肖三・河・御陽相) ⑩

あらむに—あらむに(ありけんに—三) 以上、三に近くも見える

が、「⑦行はれむ—ゆきはなれなん(肖三) ⑧はかりは—はかり(三)

⑪おりく—おりくも(三)」などでは「大成」底本側。

花散里 ⑥なこりの—なこり(明三・河・別)、⑨たまふに—たまは

ぬ(ナシ) ⑭たまへは—たまへは(明三・御) 以上、明三に

近きがごとし。

須磨 ⑨又一補入(諸本「また」アリ) ⑪おほえ(おほす—ナシ)

⑬かとしてにもや—かとしてにてもや(かとしてにてもや—ナシ) ⑬も

ろともにもやーもろとに。や（もろともにもや<sup>別</sup>御） 以上、孤立異文の存在反映か、単なる誤写か、いずれにしても資料不足。

明石 ①いとーいとー（いと<sup>別</sup>池肖三） ⑤さはかれてーさはか

されて（横陽三） ⑤名やー名。や（名をや<sup>を</sup>横陽池肖三） ⑥。

夢（御夢<sup>別</sup>横陽池肖三・河） ⑩そをちーそほち（横池肖三・御七

平大尾） ⑫しらるーしらる。ー（しらる<sup>を</sup>横池肖三） 以上、書入本

文は三に近いが「⑦雲まなくてーくもまもなく（横陽池肖三） ⑫

御文にー御ふみには（池肖三）」に書入訂正はない。

濡標 ②たまえむーたまふらん（家横平池肖三・河） ③世の人ー世

の人の（肖） ④おほきさきーおほきさき猶（家平池三） ⑥給て

ーた給て（ナシ、「た」誤記カ） ⑪内侍のかみー内侍のかみ。⑫給て

侍のかみの<sup>せ</sup>家平三） ⑫給つるーたまへる（家横平池肖三） ⑫

うせーうけ（うけ<sup>せ</sup>ナシ） 以上、書入本文を含めて三に近い点も

あるが、「⑨の給はせつーの給せなとしつ、（家平三）」は合致せ

ず。

蓮生 ①さまくーにーさまく（御横為柳池肖三） ④うきふしを

ーうきふしをも（肖） ⑥人にもーひとにも（人に<sup>別</sup>三） ⑪たも

と。⑩。たもと（御たもと<sup>御</sup>ナシ） 以上、訂正本本文を含めて、やや

三に近いが「⑤そのかすとーそのかすとも（池三）」は合致せず。

関屋 ③なくてーなくて（なく<sup>別</sup>柳三肖池） ④いさゝかかのーい

さゝかの（横柳池肖三） ⑭みえたるーみえける（みえける<sup>た</sup>ナシ）

以上、三との共通異文もあるが、「⑪せき山ーせき（横池三） ⑫す

くしーすこし（三） ⑬はかりそーはかり（横三）」では一致せず。

絵合 ②院にもー院にも<sup>も無イ</sup>（院にも<sup>も</sup>池、院にも<sup>も</sup>肖三） ④とま

りてーと。まりて（と<sup>と</sup>まりて<sup>と</sup>ナシ） ⑥うちみたれのーうちみ

たりの（御横柳陽池肖三） 以上、資料不足で判然としないが、底

本に孤立本文の散見される巻。

松風 ⑤こまかなるーこまかなり（横為氏陽池肖三） ⑦のほり給

ぬへきーのほりぬへき（横為氏陽池肖<sup>河</sup>・御保冷大國 cf のほり給へ

き<sup>三</sup>） ⑬おひいてーおひいて、（肖） 以上、三よりは肖に近

く見えるが、「⑥御すみ所ー御やすみ所（肖）」などの一致しない例

あり。

薄雲 ①かはつらーかつら（横池耕<sup>河</sup>・宮 cf か。つら<sup>は</sup>大三） ⑫

ましてーさして（さして<sup>マ</sup>ナシ） ⑭給ふー給ふ。⑮給ふそ<sup>ッ</sup>ナシ）

⑭つてにもーつてにても（ナシ） 以上、資料不足ながら、孤立異

文やあり。特に三との親疎傾向は認められない。

朝顔 ③御かへりー御返（為池耕三） ⑨しはふきーしめふき（ナ

シ） 以上、資料の乏しいのは、底本と三との異同がほとんどない

ことが理由か。

乙女 ⑤のとやかにーのとかに（肖三） ⑩とめ給てーとめ給て

（横平池肖三・陽麦<sup>別</sup>阿） ⑭まきらかすーまきらはす（横池肖三・

御宮大鳳尾<sup>別</sup>讀陽保） 以上、肖三に近いが、「⑪おほしの給へとーお

もほしのたまへと（肖三）」は一致せず。

玉璽 ⑨や事なきーやんことなき（横池肖三） 以上は表記上の差

で、異同はないと見るべきであろう。ただし「⑨まいてーナシ(三) ⑫もらすなとーもらすななと(肖)」とあるので、陽明本は底本に近いと言える。

初音 ①うらゝけさーうらゝかけさ(肖三・河・大)<sup>別</sup> ③かすみの

ーかすみに(慈横肖三・河・別) 以上、肖三に近いが、「⑤たまへるー給つゝ(肖) ⑩こゝかしこにーこゝかしこ(横三)」など一致しない例あり。

胡蝶 異同ナシ。「⑬かちとりのーかちとり(横池三) ⑭まことの

ーまことに(三三)」の例を見ると、三と距離あるか。

蛭 異同ナシ。「①のとやかにーナシ(三三) ⑫はしたなくーはした

なくは(三三)」などの例により、三とはやや遠いか。

常夏 ③てうしてーてうし(ナシ) ④おりよくーおりよくも(ナ

シ) ⑥なるほとーなるほとに(ナシ) ⑩たへかたからむなをひ

ひもーたへかたからんなをしひも(肖) 以上、独自異文がやや目

立ち、肖と一致する箇所はあるが、資料不足で判じがたい。

篝火 ②人ー人の(人の〓ナシ) ⑫衣もーころも(池) 以上、

資料不足で判じがたいが、「②ともあれーとも(三三) ④あまりーあ

まりに(御横池三) ⑦こそとーこそ(横三) ⑧たてまつらまし

にーたてまつらましかは(三三)」など三よりは遠い例がある。巻序よ

り見てほぼ中央に位置し、最短の巻でもあるので、第二、四頁の巻

尾までの異同を検するとどうなるか、続けて示す。

第二頁③かゝり火のーかゝり火(河) ⑤ひろこりたる(宮尾)<sup>河</sup> ⑬

なりけりとーなりやと(三三) 第三頁③たりーたなり(御三・河・

保)<sup>別</sup> ④あなるーありける(御横肖三) ④ねかなーねともかな(ナ

シ) ⑥なりけりーなりけり(御横為肖三・河) 再び以上と併

せ考えると、『大成』第一頁のみで検したのとは様子が異なる。三と

も共通異文を見るが、それより、河内本諸本と一致する異文が散見

されるのは、青表紙本の枠内ではあっても、ややほみ出した本文と

言えるであろう。私は源氏物語の伝本調査に際し、およその本文傾

向を見るのに、まず『大成』一頁分(写本で約一丁半余)を各巻ご

とに比較することで見通しを立て、資料不足であれば、第二、三頁

に及ぶ方法をとることがある。ここではその方法に従っているが、

同じ青表紙本系統内のゆれを検するという場合に、そこに方法的限

界を見るべきであろう。従って、後半の巻は異同データのみを示す。

野分 異同ナシ。なお「⑦なともーなと(三三)」は不一致。

行幸 ⑬いさゝかつゝーいさゝか。<sup>ツ</sup>(いさゝか〓肖三・大・陽麦)<sup>河別</sup> ⑭

なともーなと(横池三 cf なと。〓肖) ①よからむーよか

らむ(三三) ⑨いへとーいへは(三三)」は不一致。

藤袴 ③心をきー御こゝろをき(ナシ) ⑤たてまつれるーたてま

つる(御鎮池肖三) ⑪おほさむ所ーおほさむ所を(鎮池肖

三三)」は不一致。

真木柱 ⑦うとみーおほしうとみ(御横為池肖三・河・陽保麦阿)<sup>別</sup>

⑬よくもーよく。<sup>し</sup>(よくしも〓御横為池肖三) ⑥たにーた

にも(三三) ⑧そこらーそこらの(三三)」は不一致。



梅枝 ⑦故院—この院(この院ナシ) ⑫ことしけく—しけく(横

池肖・陽保麦阿 cf ナシ ③三

藤裏葉 ③たまふなるを—給ふたなるを(たまひたなるを御池

給たなるを ③三 ④人はるからぬ—人わるからぬ(人わるからぬ

御横池肖三) ⑨かろく—しき—かるく—しき(横三) なお「⑦

さやうに—ナシ(御池三)は不一致。

若菜上 ③宮—宮の(横陽池肖三・別) ⑪きこえ—きこえ給(御

横陽池肖国・河・保 cf きこえ。 ③三 ⑬世の中を—世の中を(世

の中ナシ) なお「⑦その中に—中に(三)は不一致。

若菜下 ③つけても—つけて(横陽池肖三・阿) ⑤あまた—補入

(ナシ) ⑦くちおしくと—くちおしくと(くちおしと ③三) ⑬

えむなる—えむなり(えむなりナシ) ⑭いあてつへき—あてつ

へき(横陽池陽肖三) なお「⑥きさらきと—きさらきにと(三)は不一致。

柏木 ③又—補入(又 ③横 ナシ ③河・御国麦阿) ⑦おとしし

—おとし。 (おとし ③ナシ) ⑧すゝみにしを—すゝみにしか

と(すゝみにしかと ③保) ⑭こそは—こそ(大三) なお「⑫な

きは—なきを(三)は不一致。

横笛 ⑪おとゝ—おとゝも(おとゝ。 ③肖)

夕霧 ⑧あらしやは—あらしはや(あらしはや ③平 ③河 ③あらしや ③

三・麦阿) ⑨事をも(事を ③国) ⑩御けはひを—御けはひをも

(肖三) ⑪わつらひ給て—わつらひ給て(わつらひて ③ナシ) ⑫

しに—しにて(横池肖三・河・別) ⑭むかし—まことのむかし(横

池肖三・河・別)

御法 ⑨かゝつらはむ—かゝへらはむ(かゝへらはむ ③ナシ)

幻 ⑩み給へる—みえ給へる(三・河) ⑭つかうまつれる—つか

うまつる(池肖三・河・別) なお「⑪すみそめのいろ—すみそめ

いろ(池三)は不一致。

句宮 ⑧はくゝみきこえ—はくゝみ(三・河) ⑩うらすみ(うら

すみ ③ナシ) ⑫兵部卿—兵部卿宮(肖三・河・別) ⑬六条院—六

条院の(肖・麦阿)

紅梅 ②らうく—しう—両く—しう(御横池三) ④なかりける—な

かりけり(御横池三) ⑥給へりし—給ひしを(給しを ③七・飯)

⑧北のかた—北のかた(御地 ③平) ⑧御はらに—御はらにも(御

池三) ⑫なま—なと(なと ③ナシ) なお「②さしつきよ—さし

つきに(御三) ⑧二人—二人(三) ⑩おもひきこえかなし—思

かはしきこえ(三)は不一致。

竹河 ③ほけたりける—ほけたる(ほけたる ③七) ⑩らうし給

—らうし給(りやうし給 ③横陽三) なお「⑩所—の—ところ

く(横陽池肖三) ⑬すぎ給へりける—すぎたまへる(三)は不

一致。

橋姫 ⑤なく—なくて(ナシ) ⑦ふるき—ふかき(池肖三・河・

別) ⑫さしつゝき—又さしつゝき(池肖三・河・別) ⑬なと—なとみな(前池肖三)

総角 ③ なんとそーなん (御肖三 七尾前鳳 保平) ⑩ こそーこそ

は (池肖三・宮尾大前鳳・保平) ⑫ ひきかけゝむもーひきかけゝ

むを (御池肖三・河・保)

寄木 ⑥ すくせーくせ (ナシ) ⑥ いかてーいかて (いかに ③)

⑫ たゆみなくて (たゆみなく 陽阿) ⑭ きせーきせきせ (肖国)

なお「心もーこゝろ (三) ⑬ このみーこのみて (池肖三)」は不一致。

東屋 ⑤ さまでもーさまでは (さまでは ③ ナシ) ⑥ なんとそーなんと

(池) ⑩ しなしてもーなしても (櫛三・国) ⑫ もてなやましーも

てなやまし (櫛・河・御宮陽保池 cf もてなやまし ③) ⑬

よをーを (櫛三・河・御宮保池国)

浮舟 ⑩ あるましきーあるましき (さるましき 櫛肖三・河・宮国

麦) ⑩ ほんしやうー御本正 (櫛肖三・麦) なお「⑪ おほしゝむ

めるーおほししめる (櫛三) ⑫ いつかたさまにもーいつかたさま

にても (櫛) は不一致。

蜻蛉 ④ 給へるー給へる (たまひつる 横三・御尾前) ⑤ 思ひや

るー思うる (思ゆる 横池・御尾前鳳大 cf さらにおもひうる ③

肖三) ⑨ おそろしくーおそろしく (おほつかなく ③ ナシ) なお

「⑩ なとーいと心もとなく (三)」は不一致。

手習 ⑧ ふかくーふかくて (肖) ⑩ 人さまー人のさま (櫛二肖三・

河・宮保池国桃) ⑪ しけるをーしはへるを (三) ⑫ 思いてーお

もひて (ナシ) ⑫ ことそーことゝ (櫛二肖三・河・別) ⑭ 方は

ーところは (櫛二肖三・阿) ⑭ ければーけるを (櫛二肖三・阿)

以上で各巻の本文の異同を列記してきたが、三条西家証本 (日大本)

本文との関係を中心に考えても、親疎それぞれの傾向を示す巻もあるに

はあるが、むしろ判然としない巻の方が多い。これは篝火の項で述べた

ように、「大成」一頁分のみの検証によって、本文のおよその性格を知ろ

うとする方法に無理があるように思える。いずれの系統に属するか、あ

るいは別本かどうかという区分程度であれば、この方法は、かなりの効

果を持つが、同じ青表紙本系統の中で、知られている諸本との親近性を

調べようとすると、困難が生じるのであろう。しかし翻って考えると、

これは、例えば「大成」底本、特に大島本と三条西家証本との異同が、

かなり顕著な巻である場合には、いずれに近いかが容易に判定できるの

であるから、そもそも両者の親近性に根ざすところが多い。両者が極め

て接近して、ほとんど同一本文であれば、どちらに近いかは意味を失っ

てしまうからである。前節でも触れたように、青表紙本文のゆれが、巻

によって、なぜ振幅をことにするかを問題とすべきなのであろう。

これは「大成」校異欄を漫然と見ていても感じられることであるが、

右の陽明本の本文異同をそれに照らして見ると、例えば「三」が「大成」

底本に対立する本文の多くは、河内本や別本の一部と展々一致している

のが際立ってあらわれている。「三」が「肖」と親密であるのは周知のこ

とであり、そこで以上の現象を以て、室町期の源氏享受グループが、青

表紙本以外の本文と接触させたための混雑本文、と説明するのは容易で

本や横山本、あるいは同期書写の零本が「三」に一致する場合をどう理解するかが問題である。定家筆の柏木や、定家筆臨模明融本の残る巻々のみが純一な青表紙本であるかどうかの議論は措いても、「三」などが孤立して、その共通異文を「大成」校異欄に見つけえない場合の多くは、「大成」底本文が、河内本・別本と共通本文を有している、ということに注意すべきではないかと思うのである。論理的に明白この上ないことであるが、三条西家証本を底本にした校異欄を予想すると、逆の錯覚が起るのではないかと思うからである。所詮錯覚であるとは言え、仮に数量的な処理を行ったときの絶対数値の動きに、視点を連動させうるためには、「大成」からデータを引き出す際に、かなり重層的処置を加える必要があるのではないかということである。

陽明文庫蔵(一)の本は実隆らを含む寄合書である。日大本を実隆ひとりの筆になるものでない点より見るなら同じとも言えるが、公条・公順の助力で家本を作成した経過を見ると、単なる寄合書とは言えない。しかしこれも、それぞれの巻の親本が纏って伝来していたものではないので、親本を集めたものを想定するなら、それは取合本である。ただそこに実隆の見識が強く働いている上で、恣意的集合としての取合本とは区別され、日大本は巻ごとの整合性が比較的高い本文と考えられる。同じ実隆が加わっている、(一)は、夢浮橋が欠けているためもあつてか、関与のありようが全く詳かでない。そこで関与の方法が明確な日大本「三」との比較を「大成」を介して行つたわけであるが、以上のように巻ごとに違うのである。親と疎といずれの巻が多いか、整理しても分析に耐える

数値はえられそうにない。すなわち、室町期以降、特に盛行した寄合書は、さきの書陵部本に見られるような大きなゆれを時に見せるほどの、おどかなものがあつて、それは実隆が「青表紙証本」と識した場合でも避けられないものである。従つて、実態として巻ごとの本文を調べるほかはないので、その限りにおいて、(一)は、すべてが青表紙本である点で整合性があり、「三」との異同をどう理解するかは、青表紙本とは何かを明らかにしていく中で考えていくべき問題ではないかと思う。そこですべて青表紙本と見られる陽明文庫蔵(二)以下の伝本については、原則として本文の細かな検討は省き、書写状況を見る上での書誌に限定して述べていくこととする。

## 七

### (二) 陽明文庫蔵近衛信尹等筆本

写本、列帖装、五四冊。縦二三・七センチ、横一七・六センチ。表紙、胡粉塗白鼠色地雪母刷波千鳥文。見返し、本文と共紙、本文科紙、鳥の子。外題は中央に白題簽を貼り、「きり壺」「はゝ木」「うつせみ」「手習」「夢浮はし」とあり、各帖とも内題はない。本文は、いずれも前付遊紙一丁(扉紙)をおき、次葉表より毎半葉十行に本文を書写する。後付遊紙は〇〇六枚。本文丁数は、桐壺(二七)、帚木(五〇)、空蟬(一〇) 〓若菜上(一一二)、若菜下(一〇五)、柏木(四四) 〓蜻蛉(六一)、手習(六八)、夢浮橋(二六) などである。

奥書は藤袴に

文禄五年八月 七十一才

梅枝に

慶長十三年仲春朔書之 翌朝加一校朱点訖 素然

とある。次に述べる「源氏目録」によると、藤袴は「桂福院／常観女<sup>娘</sup>」、梅枝は「中院入道／也足」とあるので、梅枝奥書の署名はそれと一致している。文禄五年（一五九六）は十二月二十七日に改元され、慶長となっているので、この寄合書は、右の二帖のみで十二年の間隔が開いている。この五十四帖が一連の寄合書であるなら、少くともそれ以上の歳月を要した筈で、当時の源氏書写のありようとして興味深い。素然中院道勝は慶長十三年には五十三歳で、翌々年三月に没している。

付属文書の筆者目録は、茶色い葉袋紙風の斐紙を用いた継紙一巻で、冒頭は次のようである。

### 源氏目録

きりつほ

照高院殿

号道澄准后

はくき

端一ク、リ

近衛殿

号伯尹公

中一ク、リ

中院入道

号也足軒

奥一ク、リ

同号通村卿

うつせみ

大覚寺殿

号空性

夕かほ

広橋殿

号兼勝公

わかむらさき 西洞院<sup>時広卿</sup>

右の実際の書きようは、巻名をほぼ等間隔に書いたあと筆者名を記したらしく、三人いる帚木の筆者名が空蟬の下より更に左にまで至ったので、三名に弧線を冠して括り、空蟬は巻名の下より左斜下にまた弧線を引いて筆者名を記している。このことは、料紙、体裁をも含めて、これが草稿の状態を示しているのを意味し、古筆家の作成した筆者目録とは同列に扱えないのではないか、言い換えれば筆者名は、事実上発して書かれていように思われるのである。筆者数が多いので、前掲に続けて、巻序に従い伝称筆者名を列記しておく。

末摘花（昭高院殿<sup>号道勝</sup>）、紅葉賀（曼珠院殿<sup>号良怒</sup>）、花宴（蜻房）、葵（妙法院殿）、賢木一空白、花散里（紹巴法師）、須磨（菩提山院）、明石（少内記）、滞標（日野殿<sup>号輝資卿</sup>）、蓬生（鷹司殿<sup>号伯房公</sup>）、関屋（近衛殿<sup>号前久公</sup>）、絵合（青連<sup>号マヤ</sup>院殿<sup>号専朝</sup>）、松風（水無瀬入道<sup>号兼成卿</sup>）、薄雲（圓山内匠助<sup>本願寺侍</sup>）、朝顔（阿野夷頭卿）、乙女（西洞院<sup>時広卿</sup>）、玉鬘（正親町<sup>季康朝臣</sup>）、初音一空白、胡蝶（飛鳥井雅庸卿）、螢（勧修寺<sup>光豊卿</sup>）、常夏（菌基継卿）、篝火（昌叱法橋）、野分（烏丸<sup>光宣卿</sup>）、行幸（中院通村卿）、藤袴（桂福院常観<sup>娘</sup>）、真木柱（水無瀬氏成卿）、梅枝（中院入道<sup>也足</sup>）、藤裏葉（三条西実条卿）、若葉上（池尾）、若葉下（池尾）ト書イテ抹消、柏木（六条有広卿）、横笛（広橋<sup>綱光卿</sup>）、鈴虫（長岡幽濟）、夕霧（粟津右近本願寺侍）、御法（西洞院<sup>時広卿</sup>）、幻一〇トノミアリー、勾宮（玄仍）、紅梅（昌塚）、竹河（日野<sup>資勝卿</sup>）、橋姫一〇トノミアリー、椎本

(了任)、総角(二乗院殿侍中<sup>中泊左京</sup>)、早蕨(鳥丸<sup>光広卿</sup>)、宿木(西洞院時<sup>広卿</sup>)、東屋(粟津右近<sup>本願寺侍</sup>)、浮舟(伊勢友枕<sup>俗名定智</sup>)、蜻蛉(西洞院時<sup>広卿</sup>)、手習(園基<sup>任朝臣</sup>)、夢浮橋(伏見殿)

筆者数は四十五名であり、ほとんどが一帖のみを書写している中で、

近衛信尹が帚木一帖の三分の一である一括りを写し、中院通勝・通村父子が各一帖と一括りを担当しているほか、西洞院時広なる人物がひとり、若紫・乙女・御法・宿木・蜻蛉の五帖をも写しているのが注目される。

広い階層にわたっているので、誰と確認できない人物もいるが、堂上人や連歌師たちは、いずれも文禄・慶長期に盛行した和歌会・連歌会に名の見える人たちで、そうした場が、源氏物語の講釈や書写が行われる背景となったのであろう。ただ、それらの会の現存記録の中には管見にして時広の名が見えず、公卿補任にもないのである。思うに、この目録には誤写か誤記があつて、時広が著名な西洞院時慶であると都合は良いのであるが、今は筆跡の判定などが及ばないので、機会を改めることとしたい。なお、本文に朱の句読点 合点などを見るが、異文注記を除いた書入などはない。

### (三) 陽明文庫蔵近衛尚嗣筆本

本稿第五節に触れた本である。写本、仮綴列帖装、三三冊。桐壺と若菜下以降、未書写で終るか。各括りが分離しないよう仮に糸とめてあるだけなので、一帖づつ楮紙にて包む。まだ切り揃えていない状態であるが、縦一七・七センチ、横一九・六センチ。表紙はなく、前付遊紙および二枚、後付遊紙〇〇五枚。内題もなく、巻名は包紙の上書にある識

語に見るのみ。毎半葉十行書写、本文丁数は、帚木(六七)、空蟬(一四)、夕顔(六一)〔藤裏葉(三四)、若菜上(一四三)〕など。包紙の上書の一部を示すと次の通りである。

正保第二年自閏五月初日書之。

同月十一月一卷遂書写之功畢／帚木之卷六くゝり

正保二年閏五月十二日書之畢／空蟬卷二くゝり

正保第二年霜月廿四日より書始之／同月廿五日書之畢 源氏書写久

中絶ニテ廿四日より再興也／初音之卷三くゝり

正保二年十二月六日より書始之／同三年正月廿九日書之畢也／床夏

之卷三くゝり

正保三年五月十六日より書始之 同年七月廿三日書之畢／若菜之上

卷五くゝり

桐壺の巻がないのは、散佚した可能性も考えられるが、右を見ると、帚木に「正保第二年」と「第」があるのは、しばらく中絶して再会した初音の巻と二巻分のみであり、また両巻には「一卷遂書写之功畢」だの「再興」云々などと若干の感慨などが識されている。そこで書写は帚木より始められたかと仮定すると、現存しない桐壺は、手習まで写し終ってから、夢浮橋と併せて、しかるべき能筆か貴人に書写して貰う心づもりではなかったかと推定されるのである。尚嗣より見ての貴人の筆となると、宸筆かとも思われるが、それ以上の憶測は無用であろう。木箱に貼られた白紙には「妙有真空院殿御筆／源氏物語<sup>三十三冊</sup>」と墨書されている。

四 陽明文庫藏近衛基熙筆本

本稿第五節に(三)とともに述べた。写本、列帖装、五四冊。縦一七・九センチ、横一八・一センチ。表紙、白茶厚手斐紙に金銀泥にて草花を描く。見返し、布目金紙。本文料紙、鳥の子。外題、金砂子蒔紋紙の題簽を中央に貼り、「桐つほ」「はゝき木」「うつ蟬」「手ならひ」「夢のうき橋」とある。各帖とも内題はない。本文は、いずれも前付遊紙一丁(扉紙)をおき、次葉表より毎半葉十行に書写する。後付遊紙は〇〇四枚。本文丁数は、桐壺(三三)、帚木(五九)、空蟬(一四)〇若菜上(一二八)、若菜下(一二四)、柏木(五一)〇手習(九二)、夢浮橋(二三)などである。

上述のように、これは三条西家証本(日大本)の転写本で、間に後陽成天皇宸筆等本、平松時量写本が介在する。従つて、それらの奥書の一部を写した上で、更にみずからの書写奥書をも識している。

〔空蟬〕

大永五年八月七日終日書之

〔花宴〕

本逍遙院筆／本肖柏筆／以京極黃門定家卿自筆校合畢

〔花散里〕

本ニ花散里 表紙浅黄唐紙外題紫色帗筆逍遙院殿

〔篝火〕

享祿三八廿八書了九月十四日校了

〔手習〕

(1) 本云 以証本書写之老後之／手習無益漸愧々々／享祿辛卯正月廿

日／逍遙叟七十七歳説合直付了

(2) 右申出 新院御本宸筆也 今一校／相違之所以青墨直付仮名遣真名

仮名之相違／同書付行数亦畫之重而可新写者也／寛文四年五月三日  
平判

(3) 抑此物語以青表帗本為証授 雖然累年求之難得 而幸有前平中納

言入道略月所書本子細見常為握翫 自元祿十三年九月廿七日書之 至

去年五月廿五日終功 即日企独校合至今日周備之了歡喜、是聊

存導志子孫於和歌勿懈怠矣 宝永二年九月十九日 以也見子(花押)  
たのまれぬ身とはしりつゝわたりきて今日までは見つゆめのうき橋

〔夢浮橋〕

(1) 本云 享祿四年正月廿二日終書写之功者也／槐陰逍遙叟堯空説合直

付了

(2) 以三条西家伝之証本令謄写了／慶長十九稔仲春中辭／從神武百余

代孫太上天皇御判

書写経緯は手習の(3)に見る通りで、既に述べたが、右の一連の本奥書を見ると、いささかの不審が生じる。実隆らの写した日大本には各巻奥の多くに、大永五年なり、享祿三、四年の書写終了の識語があるが、現在、書院部に蔵される後陽成天皇本では、一部の巻の奥書が写されているのみで、それは花宴・手習・夢浮橋の三帖である。従つて、日大本を引継いだ後陽成天皇本の奥書のうち、篝火は失われているので詳かでないが、空蟬には奥書がないのである。つまり、基熙書写本空蟬にある奥

書は確かに日大本に見られるのではあるが、後陽成本にないとなると、いずれに依ったのかという疑問が生じる。次に、花散里奥書は、内容からして日大本にある筈もないが、装丁や筆者を伝える「本ニ」の「本」とはいずれを指すのであろう。また、この巻に限って書かれた事情も詳かでない。これらは、当時における日大本の状態ともかわると思われるが、ここでは不審を述べるにとどめておく。

付属文書として無外題の筆写記録一冊があり、表紙は白地に青色雲形漉文。内題に「源氏物語書写校合日数目錄」とある。上に巻名を記して、下に書写の開始日と終了を右寄せに書き、その左隣に朱で同様に校合の日を注すること、次のようである。（朱はゴシック体で示す）

桐 壺

元禄十六正五番始十四功終  
宝永元五升五独校合始廿七終

はゝき木

元禄十六正十五始廿六終功  
宝永元五升八始六二終

（中略）

若菜上

元禄十三九升七始廿八終  
宝永元十二七始二升八終

若菜下

元禄十三十升八始同十四正州終  
宝永二二升八始五二終

柏 木

元禄十五十二九始廿七終  
宝永二五三始十八終

（中略）

夢浮橋

宝永元五十八始廿五一部終功  
宝永二九十五始十六終独校了

書写の順序については第五節に述べた通りなので繰返さないが、この目錄の巻序の真木柱・梅枝・藤裏葉とあるべきところが「梅枝／藤裏葉／楨柱」とあり、この順で写されている。そして右の日数目錄について、「源氏紙重」と題し、各巻の本文丁数を記したあと、「右青表帋の帋数也」と注している。書写奥書に「歡喜」とあるように、基熙は会心の自筆源氏物語五十四帖を前に、目錄を作成したのであろう。克明な筆写記録として興味深い。

（五）陽明文庫蔵伝宗昏筆本 付稻垣休也筆系圖

写本、列帖装、五四冊、付一冊。縦二三・八センチ、横一七・七センチ。表紙、浅葱色無地。（系圖は無表紙、仮綴）見返し、縹色ぼかし地に銀切箔蒔。本文料紙は鳥の子。外題、金泥描き紋紙題簽を中央に帖り、「きりつは」「はゝ木ゝ」などと記す。内題なし。本文は、各巻すべて前付遊紙二丁をおき、次葉表より每半葉十行に書写する。後付遊紙は一丁四丁。本文丁数は、桐壺（三〇）、帚木（五〇）／夢浮橋（二八）などである。なお、末摘花は本文三二丁であるが、第一括りの綴目の内側一枚二丁が除かれ、代りに鳥の子白紙を綴じているので、二丁欠。本体に奥書はない。

切紙が一通あり、

源氏物語 定筆

南都蓮歌師／宗昏筆  
系圖 稻垣休也筆

と書かれている。宗昏の伝は詳かでないが、本文は室町時代末期と思われる筆風ながら、一人の筆になるものではなく、四、五人の手と判断される。勿論、この中に宗昏なる人物の筆跡が含まれているかどうか不明

らかでないが、切紙が筆者を一人とするのは誤りである。葵など巻により、本文に朱の句読点、青の濁点や略注を散見する。

系図は色変り紙三〇丁を用い、金泥の文様を描く。奥書に

寛永拾六年<sup>卯巳</sup>林鐘中旬／稻墻休也書之

とある。その伝、また詳かでない。

(六) 陽明文庫蔵江戸初期頃書写本

写本、袋綴、五四冊。縦二一・九センチ、横一九・二センチ。表紙、浅葱色無地。見返し、本文共紙。本文料紙、斐紙薄様。外題、白紙題簽を中央に貼り「きりつほ」「はゝき木」などと巻序をも記す。前付遊紙を各巻一丁（扉紙）おくが、葵・関屋の二冊のみは欠き、本文は毎半葉九行書写、後付遊紙は七冊に各一丁を見るが、他はない。本文丁数は桐壺（三五）、帚木（七三）／夢浮橋（二四）などである。

筆者は詳かでないが、元和・寛永頃の、三、四人による寄合書であろう。全体の三分の一、三六冊の奥に大きな花押を書くが、所蔵者に係わるものと思われる。横笛の尾丁に「以通村卿本一校了」とある。本文に朱墨の異文注記、略注などあるが、別筆らしい。

(七) 陽明文庫蔵伝鷺尾隆量筆本

写本、列帖装、五四冊。縦二五・一センチ、横一七・九センチ。表紙、藍色無地。見返し、金箔梨地時。本文料紙、鳥の子。外題は、金泥紋紙（桐壺のみ更に草花を描く）題簽を中央に貼り、「桐つほ」「はゝ木ゝ」などと記す。内題はない。本文は、寄木を除いて前付遊紙一丁（扉紙）をおき、次葉表より毎半葉十行書写。後付遊紙は〇／二丁。本文丁数は、

桐壺（二八）、帚木（五〇）／夢浮橋（二五）などである。

付属文書に折紙一通、包紙の上書に「鷺尾殿隆量卿<sup>源氏物語</sup>折紙」と題す。折紙に

源氏物語<sup>全部五十四帖</sup>／いつれの御時にか／山におはして／鷺尾大納言

隆量卿／芳翰無疑者也

天保七年  
初春上旬 古筆了伴

とある。隆量は寛文二年（一六六二）八月に五十七歳で薨じているが、この写し手であるかどうかは定かでない。江戸前期写。

(八) 陽明文庫蔵法橋常知筆本

写本、列帖装、五四冊。縦一五・五センチ、横一六・三センチ。表紙、各巻色代り無地。見返し、本文共紙。本文料紙、鳥の子。外題は、淡青色地に金泥縞文様の題簽を中央に貼り、「きりつほ」「はゝ木ゝ」／夢のうきはし」などと記す。野分は「のわけ」とある。内題はない。本文は、すべて前付遊紙一丁（扉紙）をおき、次葉表より毎半葉十行に写す。後付遊紙は〇／四丁。本文丁数は、桐壺（三〇）、帚木（五四）／夢浮橋（一九）などである。

夢浮橋の奥に、

寛文十三年／丑三月 日 八拾五歳筆／法橋常知

とある。常知とは連歌師らしいが、伝を知らない。

(九) 陽明文庫蔵伝大炊御門経孝筆本<sup>付系図</sup>

写本、列帖装 五四冊、付系図一冊。縦二二・九センチ、横一七・三センチ。表紙、緑色地網目に花菱文の緞子裂。見返し、金泥で草木雪霞



文を描く。本文料紙、鳥の子。外題は、金銀砂子を蒔いた題簽を中央に貼り、「きりつほ」「はゝき木」ゝ「夢のうき橋」とある。内題はない。前付遊紙は絵合が二丁のほかは、すべて各二丁、次葉表より本文を每半葉十行に写す。後付遊紙一ゝ四丁。本文丁数は、桐壺(二七)、帚木(四八)ゝ夢浮橋(二二)などである。系図は折本一七折であるが、表紙を同じくし、やや小型。

付属文書の折紙一通に、

源氏物語五十四冊并／系図折本有之／きりつほ／いつれの御時に

か／夢のうき橋／山におはして／大炊御門経孝公／外題／青蓮院宮

尊純法親王／右芳翰無疑者也

天明七年 初穂仲旬 古筆了意

山琴

とある。大炊御門経孝は天和二年(一六八二)六月に七十歳で薨じている。また、外題筆者とする尊純法親王は、系図纂要によると後陽成天皇猶子で、承応二年(一六五三)五月に六十三歳で薨じているので、鑑定通りとすれば承応二年以前の書写本となるが、もとより定かでない。江戸中期の書写。

以上で、陽明文庫所蔵の、鎌倉期書写本を除く揃い本、乃至はそれに準じる本の紹介を終るが、同文庫には、他にも零本数部が蔵されている。花宴・紅葉賀・松風(松風は為兼卿和歌抄の紙背)・夕霧・御法などで、すべて袋綴(花宴は仮綴・松風は紙背を開き読めるよう装丁されている)の各別表紙ながら、花宴と紅葉賀、松風と御法の二組は、料紙、大きさ、筆跡などから見て、元来は、それぞれにつれであったと推定される。い

ずれも室町時代中期頃の書写で、前者は九行、後者は十行にゆつたりと写されている。花宴は縦二六センチ、横二一センチ、御法は縦二九・五センチ、横二二・三センチの本で、それぞれつれも大同である。松風・御法は色変りや墨流しを用いた斐紙を本文に用いており、裏打をした御法は、特に紙の色が濃くあらわれている。また紅葉賀は、巻末に更に、每半葉十五行に絵詞らしき抄出文を簡条書きに写すが、柏木の後半に始めて、夕霧の前半で終わっている。別の夕霧一冊も縦二七・五センチ、横二二・五センチと大きくはあるが、江戸初期の書写であろう。以上の零本は一冊、二冊とは言え、比較的書写年代も古く、十分な吟味を加えるべきであるが、本稿では揃い本に重点を置いて述べたので、別の機会に報告したい。

## 八

青表紙本が何であるかを考える場合に、もしも定家筆の源氏物語が揃って存在するなら、たとえそれが定家が二度、三度と写した揃い本の中的一个であっても、実体そのものの資料であるには違いない。それはかならずしも、すべてが定家の筆跡でなくとも良いであろう。定家が冒頭部のみを写して他家の女房らに任せ、後に自身で点検する経過を辿った古典作品の写本は、源氏物語以外に多くの実例を示すことができる。これもまた定家本であるに違いなく、青表紙本について言えば原本であるが、原本は、目下三帖ほどの存在が知られるにとどまるのである。そしてついで重視されるのは、原本の第一次写本である。いわゆる明融

本の、定家筆臨模本がそれであり、最上質の第一次写本に当る。この場合、巻々により原本が定家筆跡でなかったならば、臨模本は当然臨模しても異なる筆跡になるし、恐らくは、臨模する意欲を失わしめたであろう。しかし、巻末に奥入を付載し、それが定家の筆跡を一部でもとどめていれば、原本よりの直接の書写本である可能性は高くなる。

東海大学が所蔵する桃園文庫旧蔵の明融本九帖は、すなわち青表紙本にとつては、原本につぐ貴重な資料である。臨模が、かなり精密に行われたことは、柏木の原本が尊経閣文庫に現存するので、両者を比較することで明らかにされている。そして、この本文は「大成」校異の補遺に示されているので、その本文内容も、ほぼ知ることができる。

明融本が近年のある時期までは五十三冊（胡蝶のみ欠）本として存在していたことは、容易に想像がつく。ついでである松田武夫氏旧蔵、山岸徳平氏蔵の四十四冊本が、一方に存在するからである。奥入があるかないかによって分離するようなあり方は、たとえば江戸時代では考えにくいであろう。現在、仄聞するところによると、山岸氏所蔵本の多くが実践女子大学に移管されつつある由なので、この明融本も、いずれはその有に帰するはずである。ところが数年以前より、この明融本が山岸氏の手許から見当らなくなったのである。

六、七年前であつたらうか、前々から明融本の閲覧を乞うていた私は、山岸氏の許しをえて実践女子大学にお伺いしたことがあつた。そして学内をいろいろお探し下さつたのであるが見付からなくて、いずれ改めて拝見することとなつたが、その後も、杳として行方が知れない由なのである。

ある。氏の御蔵書を閲覧に伺うと、すぐ御好意でお貸しくださるのは私も経験があることで、借覧されたままになっているのであろうか。

「大成」研究資料篇に「松田武夫氏蔵源氏物語」として紹介されているのによると、極札が明融と鑑定するのは四十四冊のうち二十五冊で、他は九人の筆者と極札のない筆者不詳の巻とから成っている。共通するのは、本文に定家筆臨模の巻を含まないことと、いずれにも奥入を欠いていることであるが、それでも池田氏は、「第一次奥入を欠くために青表紙本判定の直接的な基準になしがたいとはいへ、貴重すべき伝本である点に、何ら異論はない」と結論づけられている。明融を中心とした書写がいつなされたのかは定かでないが、上冷泉家の者が、当時存在した定家筆の源氏物語数巻を含む五十四帖（胡蝶は伝来の途次失われたのであろう）を書写したのであるから、これらの親本は上冷泉家に伝来した青表紙原本、乃至はそれに準ずる本であつた可能性が極めて高いのである。山岸氏蔵の明融本が、青表紙本の実体を探る上で重要な伝本であるのことは言うを俟たないのであつて、かかる本の目下の所在が知れないのは、まことに遺憾と言うほかはない。早い出現を待ちたいと思う。

かくして山岸氏蔵明融本の閲覧を乞うのは今のところ不可能であるが、紙焼写真によつてであれば、容易に調査することができる。国文学研究資料館が昭和五十三年一月に本書を撮影し、紙焼本が閲覧室に開架されているからである。そこで、この副本と、撮影ときに書誌を調査された伊井春樹氏の記録を借覧することで、四十四冊の明融の書誌をまず示しておきたい。

写本、列帖装、四十四冊。(桐壺・帚木・花宴・花散里・胡蝶・若菜上・若菜下・柏木・橋姫・浮舟の十帖欠。なお胡蝶を除く九帖は東海大学図書館に所蔵される) 縦二二・一センチ、横一四・五センチ。表紙は無色とあるが、行幸・椎本などの紙焼写真によると、表紙に芯紙を入れて包み、共紙を見返しにしているらしい。そして芯紙には稻妻菱繋ぎ地に大きな蓮を置いた文様があり、透けて見える。東海大本と同じ空押文なのであろう。料紙、鳥の子または薄様(写真副本によると、主に明融の写したという巻は薄い斐紙とおぼしく、裏うつりが甚しく読みづらい)。外題は、表紙中央に白題簽(後補)を貼り、「うつせみ<sup>三</sup>」「夕かほ<sup>四</sup>」「わかむらさき<sup>五</sup>」「すゑ摘花<sup>六</sup>」「紅葉賀<sup>七</sup>」「かけろふ<sup>五十二</sup>」「手ならひ<sup>五十三</sup>」などとあるが、五帖の題簽が剝落して、うち四帖は元題簽跡に打付書に「横笛<sup>三十七</sup>」「夕霧<sup>三十九</sup>」「御法<sup>四十</sup>」「まほろし<sup>四十一</sup>」とあるが、夢浮橋には外題がない。内題はないが、横笛の扉紙綴目に小字で「横笛」、同様、椎本に「シイカモト しゐかもと」などと見える。丁数は前付遊紙二丁(扉紙)をおくのを原則(若紫には欠く)とする。本文は空蟬(二〇)、夕顔(四二)、若紫(四九)と手習(七四)、夢浮橋(二八)などであって、後付遊紙は〇と七枚。本文はおおむね毎半葉十行書きであるが、行幸は一〇と一二行、東屋は一行書きである。空蟬・松風・句宮・紅梅・寄木・夢浮橋の表紙や、手習・夢浮橋などの扉紙に「山岸文庫」の朱印を捺す。奥書はない。

各巻の扉紙表の多くに「琴山」印を下に捺す極札様の小紙片を貼るので、その表記に従って内容を示す。

(A)上冷泉殿為和卿御息明融―空蟬・夕顔・末摘花・紅葉賀・葵・賢木・蓬生・関屋・絵合・松風・薄雲・朝顔・初音・螢・藤袴・真木柱・梅枝・鈴虫・幻・竹河(二〇帖)、(B)此付紙<sup>ヨリ</sup>奥明融御筆―須磨(一帖)、(C)上冷泉殿為和卿御息明融―明石(一帖)、(D)上冷泉殿為和卿御息明融―玉鬘(一帖)、(E)上冷泉殿庶流明融―篝火(一帖)、(F)端<sup>ヨリ</sup>女君おはす<sup>まで</sup>明融―紅梅(一帖)、(G)梶井殿―若紫(一帖)、(H)飛鳥井殿―乙女(一帖)、(I)伏見殿邦高親王―常夏(一帖)、(J)正親町殿公叙卿―野分(一帖)、(K)飛鳥井殿二樂御息曾衣―行幸(一帖)、(L)連哥師寿慶息<sup>名字失念申候</sup>―総角(一帖)、(M)榮雅ノ娘(コノ小紙片ノミ琴山ノ印ナク、ヤヤ大キ目)―寄木(一帖)、(N)大覚寺殿義俊―夢浮橋(一帖)、(O)極札ナシ―濯標・藤裏葉・横笛・夕霧・御法・句宮・椎本・早蕨・東屋・蜻蛉・手習(一帖)

以上を要するに、明融がすべて筆写したとする巻(A)(E)は二一帖、明融が端のみ写したとする巻(D)(F)は二帖、奥のみを写したとする巻(B)(C)は二帖で、まず明融筆跡のある巻が二五帖である。そして極札のない巻が一帖あって、他は八帖八筆であるという。ただ紙焼写真によると、御法が明融筆と同一なので、(A)(E)は二一帖と考えて良い。(G)の梶井殿を池田氏は「蜻庵か。後奈良天皇御猶子、入道応胤親王、慶長三年五月十七日薨、六十八」とされる。また、(H)の飛鳥井殿を「(雅康か)吉見正頼旧蔵の青表紙本は、権中納言時代の筆であるが、これは晩年の筆かとするもの」とされるが、別段にそうした注記があるわけではない。指摘される大島本雅康筆の同じ巻と比較して、かなり筆跡が異なるからであろうか。

そしてまた、榮雅に対しては、「飛為井雅親。雅康の兄。その女は能書家であつたらしく、源氏などの寄合書にその名が見える」と注されている。

明融はその伝を詳かにしないが、冷泉為和の男で為益（元龜元年一五七〇—八月に薨ず、五十五歳）の兄に当る。井上宗雄氏は、明融が永祿二年に上冷泉家で開かれた和歌会に度々出席し、源氏の書写をもしていたことが言繼卿記に見えると指摘<sup>注13</sup>されている。一方、東海大学蔵の明

融本九帖にも、扉紙には極札がすべてに帖られている。(A)と同じであるのが帯木・花宴・若菜下・柏木・橋姫・浮舟の六帖、(E)と同じであるのが花散里一帖で、桐壺には(A)が書かれている下に二行割注に「定家卿字形／御似近候哉」と見え、若菜上には「這裏一校明融御筆」とある。しかし、本文が定家筆臨模ではないとする若菜上(冒頭一丁表は定家筆臨模か)にしても、山岸氏蔵明融本における明融筆跡とは異なっている。

「一校」のみが明融というのであろうが、いずれにもその筆跡が見えない。極札における筆者名が単なる古筆家の鑑定でなく、なんらかの根拠に基づくとなると、定家筆でない校閲本の部分をも臨模したことになるのであろうか。そして、いま両所に蔵される明融本五十三帖全体を伝称に従つて考えると、うち明融筆が三十一帖、明融筆を含む巻が四帖で三五帖に達する。極札がなく筆者名不詳十帖の筆跡については、なお検討の余地があるものの、その帰趨如何にかかわらず、この寄合書は、明融がほぼ三分の一を写している点で、他に見る寄合書とは趣きを異にしている。特に定家筆跡を臨模していることを併せ考えると、これはそもそも明融の一筆書を基本とし、冷泉家本を伝えるために書写され始めたので

はないかと思わせる。端や奥の一部を明融が写しているのも、定家が、そうした方法で自家の本を写したことを連想させる。奥入を付載しない巻々の中にも、傍注のありようが臨模本や大島本に酷似している例が多く見られる。いわゆる明融本の成立が、いかなる経過を辿ったかは、青表紙本のいずれを真の証本とすべきかを追求する上でも重大な関心のあるところで、今後の十分な吟味が要請されるであろう。

## 九

寄合書が往々に本文上の混態をきたすことは、前節までも述べてきたが、寄合書とは言え、形態上も、伝称筆者の上でも、上冷泉家伝来の本と密接な関係を有する明融本である。山岸氏蔵本の本文はどうであらうか。詳細は調査の行届かないところもあり、稿を改めて述べたいが、ここでは明石までの九帖(桐壺・帯木・花宴・花散里は東海大本)の異同を示すことによって、一つの見通しを立てようと思う。まず第六節の例にならつて、各巻『大成』第二頁分の底本と校合することから始める。

### 空蟬

①まゝには—まゝに(横池肖三・河・別) ⑦いといとをし

いよくをし(訂正ハ朱カ。ナシ) ⑩ほとに—ほとにて(御横

池・河・陽飯 cf ほとにて。②三) ⑭おり—おりを(池秀肖三・河・

桃)

### 夕顔

④程に—ほと(ナシ) ④むつかしけなる—むつかしけなる

(訂正朱カ。ナシ) ⑤あたらしうして—あたらしうて(ナシ)

### 若紫

⑥いと—ナシ(ナシ) ⑧すきにけり—過<sup>にけり</sup>て(訂正朱

カ。過てニナシ) ⑪ゐたりけるゝゐたる(ナシ) ⑫たれともーた  
れと(ナシ) ⑬給へれとー。つれと(給つれとニナシ) ⑭給へ  
ねはー給はねは(肖・河) ⑮をこなひもーをこなひ。 (補入朱  
カ。をこなひニナシ)

末摘花 ①をくれしーをくれし。 (をくれしほとニ池肖三・河・  
別) ③うちとけたりしーなつかかりし (なつかかりしニ池肖

三・河・別) ⑥みゝとゝめーみゝとゝめ(肖) ⑦こそーこそは(横

池肖三・河・別) ⑧まめやかさーまめやかに (訂正朱カ。まめや

かにニナシ) ⑪けるーけり(ナシ)

紅葉賀 ④よういーよそひなんと(ナシ。cf よういなどニ河) ⑥

おなしーおなしき(河) ⑦給へるはー給へるは (訂正朱カ。給へ

る程ニ河) ⑩まさりてーいとゝまさりて(河・氏) ⑫みゝとゝ

め。とゝめ (補入ハ朱カ。とゝめー氏 cf きゝゝ河) ⑭なりけ

るーなりけり (横神陽池肖三・御氏)

葵 ⑩ひめ君ーひめ宮 (横神池肖三)

賢木 ⑤そひくたりーそひてくたり (横神池肖三・河・御陽相) ⑥

れいもーれい(ナシ) ⑨女君もー女君は(ナシ)

須磨 ③いまはいとーいまは(ナシ) ⑤人わるくそー人わるくそ

(肖三) ⑥いとーナシ (池・平・御) ⑦すみはなれーはなれ(ナ

シ) ⑦事をおほすにはーことをさすかに(ナシ。cf ことはさすか

にニ陽) ⑧そへてはーそへても(ナシ cf そへてニ池・河・別)

⑨心くるしうあはれなるをー心くるしきはなにことにすくれてあ

はれにいみしきを(心くるしけきは何事にもすくれてあはれにいみ  
しきをニ陽) ⑩一二日のほとよそゝにあかしくらすー一二日を  
のつから(ナシ。cf 一二日をのつからへたつるニ陽) ⑩たにーた  
にいかゝと(ナシ。cf たにいかゝとのみニ陽) ⑩おほつかなきも  
のにーおほつかなう(おほつかなくニ河・御陽) ⑬しのひてもろ  
ともにもやーもろともにもやしのひて(七宮尾平・陽) ⑭おりーお  
りも(御)

明石 ⑤浪かせにー浪かせ(ナシ) ⑤かろゝしきーかるゝし

き(肖) ⑤名やー名をや(横陽池肖三) ⑥夢ー御夢(横陽池肖

三・河) ⑦雲まなくてー雲まもなく(横陽池肖三) ⑦方もー方

(ナシ) ⑨まいるーまいるへき(ナシ) ⑪むつまじう哀にーあ

はれにむつまじう(河)

以上を通覧して注目されるのは紅葉賀と須磨であろうが、まずは異同  
がほぼ青表紙本系統内に収まっている他の巻を瞥見しておくこととしよ  
う。『大成』底本が往々に青表紙系諸本の中で孤立するか、三、四本と対  
立することがあり、その場合に対立本文が河内本系統や別本の一部とと  
かく共通する例が多いのは、すでに見てきたところである。空蟬では異  
同箇所も少く、誤字らしき例を除いて、内容も助詞一文字の異同ばかり  
であるが、いずれもが青表紙本系統内の対立異文群と一致しており、特  
に池と近い。これは第二頁以降の異同を更に調べていくことで一層明瞭  
になるが、明融本の本来のありようとしては、『大成』底本、すなわち、  
いわゆる青表紙原本の側に立つことが期待されるのではあろう。夕顔は

独自異文が目につくものの、同系統内に異同が乏しい巻なので、第一頁のみでは明らかな性格はあらわれない。若紫も同様な状況で特長を示したいが、末摘花では池肖三、とりわけ肖との親近性が察せられるであろう。要するに底本の側に立つと思える巻はないのであつて、これは葵・賢木についても言えるのである。

明石には⑪のような河内本系とのみ一致する異文があつて注意されるが、大筋において横陽池肖三という、底本すなわち大島本と対立する諸本の側に立ち、それが河内本系と共通異文を持つことのゆれの中にあると考えて良いであろう。ゆれがどの程度まで同系統内で許容されるのかはむづかしい問題であるが、以上見た限りにおいて、右の七帖は、明融本の名にしては、いささかの不審が残るのである。奥入付載の臨模本群九帖とは性格にかなりの差があると感じられるのである。

ゆれが大きい、と思わせるのが紅葉賀である。ここでは異同のほとんどが青表紙本群の中に収まらなくて、むしろ河内本と一致しているのである。しかしこの巻は両系統間の対立が著しく、それは別本にも反映しているの、例えば河内本と明融本紅葉賀とを対校するなら、後者は遙かに青表紙本に近いことになるであろう。ただ、それにしてもである。

【大成】もう一頁分の異同を見よう。

②にくゝてーにくゝも(にくゝもナシ) ②ことにくゝかたてもー補入。但、ことにーいとことに(河) ④まひのーまひの師の(池・河・御) ④えなむーけなむ(けなむナシ) ⑦みたりーみたれ(みたれナシ) ⑪めつらしうーめつらしう(ナシ) ⑪かや

うのーか。やうの(補入ハ朱カ。かうやうの二三) ⑭こきめぐりてー。めくりて(補入朱カ、めくりてナシ)

ここでは明融本が(写真副本で薄く写る)朱らしい筆で補訂される箇所が目立ち、補訂前の本文のほとんどが孤立している。朱らしい筆は肉太で、明融と言われる筆跡とは異なるように見えるが、孤立している本文には意味の通りにくい例が四箇所もあるので、転写上の誤りに基く可能性が強い。しかし「ことにーいとことに」「まひのーまひの師の」には河内本の影が差しており、現状より判断するなら、そうした本文との接触により混入したと考えるのが自然である。傍書の異文注記が次の書写の段階で本行に繰入れられたり、時に逆転したりすることは、十分ありうるからである。勿論、詳細な吟味は異同の全体を示してなされるべきであり、この明融本紅葉賀が、巻末に向つて異文箇所数を漸減させていく傾向のうかがえるのが、何によるのかも問題である。つまり以上のような仮説を以て、後半にいくほど祖本の異文注記が乏しかったから、ということとを理由に考えて良いかどうかの問題である。一つの巻の中でのゆれが見られるのである。ここは明融一筆の巻であるが、明融筆跡が後半にあらわれる須磨では、人が交代することで、親本が異なる可能性をも想定する必要に迫られるのである。

例示した須磨の異同を見ると、これはもはや、青表紙本でないことが瀝然としている。河内本とも明らかに異なっている。要するに別本というほかなく、それも異同内容や箇所数が尋常でないが、本稿第二節で採り上げた書陵部本(大系本底本)須磨が、鎌倉期書写陽明本に近似して

いたことが想起される。これも陽明本との親近性があらわで、しかも巻が同じ須磨である。偶然とは思いたい符合であるが、両者を繋ぐものは具体的に一つとして思い浮ばない。また両者が陽明本に近い別本文であるとは判定できるが、二つの本文が常に一致しているわけではない。前半は誰と知らない別筆で、後半より明融筆となるのである。しかしそこを堺に、差が二分されているとも言えないところに、事態の厄介さがあるようなのである。『大成』のもう二頁分の異同を示す。

- 第二頁①給へらむも―たてまつらんも(ナシ)。①つきなく―つれなく(肖) ④あはれなる―あはれけなる(御別) ⑤給へは―給へはいみしかるけき(ナシ) ⑤おほしなけき―おほし(ナシ) ⑤さまも―さま(肖・河・御別) ⑥ほのかに―ほの(別) ⑦とりなさむ―とりなされむ(横池肖三・宮河) ⑨給にも―給ふに(横池飯肖三・別) ⑩へかりける―へけりける(ナシ) ⑪いつとしも―いまとしも(横池飯肖三) ⑫つかうまつり。まつり(補入ハ朱カ。まつり―ナシ) ⑬うちしのひ―わさとならすうちしのひ(河・別) ⑭見所も―みとかる(みところ別) 第三頁①はか―しう―はる―しう(訂正ハ朱カ。はる―しう―ナシ) ①よにかくれておほいとのに―。おほい殿に世にかくれて(補入は朱カ。おほい殿に世にかくれて―ナシ。cf よにかくれておほいとのに―ナシ別) ②うちやつれ。やつれ(やつれ別) ②にて―に(河・別) ②女くるまの―女の(河・別) ③みゆ―おほゆ(肖・陽別) ③御方いと―御方はいと(ナシ。cf 御方は―河) ③うちあれたる

―。あれたる(あれたる別) ④御めのと、も―御めのとことも(ナシ) ⑩まいりて―まいりきて(横池飯肖三・御別) ⑬世中はかるへき―世の中は、かるへき(池肖三 cf 世中をは、かるへき河別) ⑬身にも―にも(肖・御別) ⑭いのちなきは心うく―いのち長心うく(ナシ。cf いのちなきはいとはしう河・別)

第一頁のみを見た場合とすこし様子が異なるのは、異文が陽とのみ一致するのが目立たず、御と共通する「別」になっている例が多いのと、別本ではむしろ、御と一致する場合が散見されることである。次に、青表紙本系内部の対立異文とも、時に数本と共通異文を有し、とりわけ肖との関係が注意されるであろう。しかし、総じて見れば、明融本須磨が別本であることを示す例証が圧倒的に多く、青表紙本・河内本両系統のいずれかに属さしめる許容範囲よりは、かけ離れた本文であると言つて良いであろう。

この巻の扉紙に貼られた極札には、「此付紙ヨリ奥明融御筆」とあつた。つまりこれは、元来筆者が交替する箇所には貼られているべきか、あるいは「此付紙ト同種ノ付紙ヨリ」と読むべきかとも思うが、一目瞭然に筆跡が代る面には確かに小紙片が貼られているものの、そこには孟津抄所引の注が記されているのみで、類似の付紙はその前にもある。ただいずれにしても筆者が交替したのは本文二六丁裏の六行目で、『大成』四一四頁12行に相当する。交替は文の切目と言えは切目であるが、前半の筆者が「こゝかしこ思ひやり給」の「給」の糸ヘンを書いたところで中止し、書きかけの文字はそのまゝに、その下より、「給ふ京へ人いたしたて」

と、いわゆる明融筆跡に引き継がれるのである。一帖を括りごとに別の写し手で分担する方法は陽明文庫本(二)にも見えるが、事情は全く異なるのであって、明融本のような交替は身近な関係以外には考えにくい。すなわち前半を明融が指示する家の者が写したとする想像ができるのであるが、そうすると親本の交替はないと考えるのが穏当なことになるであろう。しかし想像はそれとして、写し手の代り目を堺にして、前後「大成」二頁余づつ(各三二行)の異同を示しておく。

〔前半筆者〕四一二頁⑩いりたるに―いりたるか(肖三) 四一三⑧

たまへるさま―給へる。<sup>さま</sup>(補入ハ朱カ。給へる―河) ⑧さるよの

―よの(ナシ) ⑨かなしとのみ―かなしうのみ(別) ⑨人―人

くも(別) 四一四④ことゝもなと―ことゝも。<sup>なと</sup>(補入ハ朱カ。

ことゝも―ナシ) ④あそん―あそん。<sup>なと</sup>(補入ハ朱カ。あそんなど

―ナシ) ⑪なに心も―なに心(横・七・陽<sup>別</sup>) ⑫たまひしなと―給

へりしなと(横) ⑫はしめ―はしめて(河・別) ⑫思ひやりき

こえ―思ひやり。<sup>聞え</sup>(補入ハ朱カ。思ひやり―ナシ)

〔明融筆〕四一五②ゆくさき―ゆくすゑ(ナシ) ⑦事なと―なと(御<sup>別</sup>)

⑩給つる―給へる(横池肖三・河・陽<sup>別</sup>) ⑭心くるしき―御心くる

しき(ナシ) 四一六⑤おほしたて―おほし(ナシ) ⑦きくほと

は―聞ゆるほとは(ナシ) ⑬なれと―なれは<sup>と</sup>(なれは―ナシ) ⑬

このかたに―。<sup>この</sup>かたに(補入ハ朱カ。かたに―ナシ) 四一七①そ

かし―そかしと(河・別)

前後の異文の差より以前に、冒頭部における異同と比較して、質量と

もに異文が大幅に減少していることに気付くであろう。右に示した範囲でも、別本の御物本や陽明本が、「大成」底本と甚だしい異同を見せているのであるが、明融本ではほとんど一致せず、巻頭部に比較すると、あたかもそれが収斂していくようにも見えるのである。データのみを単に数量的に見ると、前半筆者の異文が別本と共通する例が多のではあるが、これでは比較の総量が不足で、やはりすべてを通したデータを提示して論じる必要がある。須磨一帖のみではない。比較は一帖ごとに切離して吟味すべきであるが、しこうして総体を計る必要があるということである。

それでも山岸氏蔵明融本を検討していく上での見通しは立つたと思う。第一に、伝来から推定された性格とは異なつて、大島本など、いわゆる第一次奥入を付載している本文とは距離がありそうな点である。これは青表紙本との距離を意味するものではない。縷述したように、青表紙原本を一種とは考えない前提で考察を進められれば良いからである。次にやはり、四十四冊の中には、青表紙本系統内のゆれでは説明ができるかと思われような紅葉賀の存在である。そして更に、到底青表紙本とは言えない須磨の本文である。それも一帖の中で異文の密度に偏りが見られるのが何を意味するのか、なお精査したいと思うが、ともかくも青表紙本でない巻が混在している事実は疑いがあるまい。これは「大成」研究資料篇においても、池田氏が「この本の本文は、殆ど全部が青表紙本系統と認められる。ただ、篝火・早蕨の両帖は河内本であり、いづれも青表紙本による校合が本文中に傍記されている。」「宿木の巻の大部分を



書いている書写者は、別本らしい本を写しており、これに青表紙との対校が示されている。」と言及されている。この青表紙とは何かという問題が、別系統本の混在と併せて考えるべきことであると思うのである。

定家が薨じてから明融が源氏物語の書写をした時代までには三百年余の歲月がある。皇室、堂上人、連歌師たちによる文化圏の中で、寄合書が京洛で盛行したのには、内なる意欲とともに、地方豪族、戦国大名よりの需要が大きき力になっている。大袈裟な言い方をするなら、室町時代、源氏物語揃い本の書写が中央で頻りになされ、その多くが全国的規模で各地に散ったのである。明融本は、その体裁からすると、それらグループの写本群とは異なり、冷泉家にゆかりのある本として、伝来を計ったかと思われるが、それでも寄合書が生ぜしめる混態は避けがたかったのであろうか。一筆書の写本であれ、親本が寄合書であれば同じことである。なお考えたいと思う。

## 注

- 1 新典社刊 昭和43年2月〜45年8月
- 2 岡野道夫「証本源氏物語の本文について―日本大学図書館蔵本と宮内庁書陵部本の性格―」【語文】第二十一輯 昭和40年6月
- 3 山岸徳平 日本古典文学大系「源氏物語二」解説 昭和33年1月
- 4 山脇毅「源氏物語の文献学的研究」所収関連論文 創元社刊 昭和19年10月（初出は『芸文』大正12年11月・同14年7月号など）
- 5 三条西公正「証本源氏物語の原本に就いて」【国語と国文学】昭和5年5月

6 岸上慎二「源氏物語解題―三条西家伝之証本―」昭和54年10月。

なお『枕草子研究（続）』笠間書院刊（昭和58年3月）に所収

7 注4に同じ。

8 大津有一「諸本解題」池田亀鑑編『源氏物語事典 下巻』所収、

東京堂刊 昭和35年6月

9 南波浩「解題」陽明叢書 源氏物語 四所収 思文閣出版刊 昭和54年12月

10 注2に同じ。

11 注9と同一シリーズ。昭和54年3月〜57年12月

12 岡野道夫「陽明本源氏物語の本文について―柏木巻をめぐる―」

【商学集志】第六巻第一号 昭和49年6月

13 井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町後期」明治書院刊 昭和47年12月

追記

本稿は、昭和五十九年度、国文学研究資料館客員教授在任中に調査整理したものである。伝本調査に際して便宜を与えて下さった宮内庁書陵部、日本大学総合図書館、陽明文庫、天理図書館の方々に厚く御礼申し上げる。また、右の期間中、鹿児島大学図書館蔵玉里文庫本源氏物語二部、岩国の吉川重喜氏蔵の吉川本源氏物語二部を調査して本稿に資する予定であったが、論及するに至らなかった。特に玉里文庫本と吉川本とに見られる室町期寄合書揃い本各一部は、近衛家、三条西家ともかわる伝本であるが、いずれ機会を改めて述べたい。